[illegible]抄

内閣文庫

番號	和	27263
冊數	10	（ 7 ）
函號	203	17

内閣文庫
和書 類 二七三六三 號 一〇 冊 二〇三 函 二 架
（七冊）

河海抄巻第十三

第二十　若菜上　　正六位上物語博士源惟良撰

巻名

小松原末のよはひにひかれてや野への若菜も年をつむへき

一名もろかつら為源氏に称今きさても若菜とも為流布之後流布用之

一篇分上下事　唐本例

礼記　第一曲禮上下　第二檀弓上下　第三檀弓上下　尚書　太甲

盤庚　説命　泰誓在上中下　周礼　天官

冢宰以下九巻も小上下あり

内閣文庫

漢書一ゟ記上ゝゝ下後漢書列傳第廿巻ゝ上下倭漢例
日本記第一第二神代上下
うつほ物語又第五第六巻ゝあての上ふきあけ以下十二巻にわたつてれ
上十三自巻下十四にわたれ上十五自下倭漢朗詠集上下とさる例
かれども書中に作者をしめさるを上下とわかるとある故人の近
立ちる侍とある所の礼記の曲礼上下ハ故人分て檀弓上下ハ記者分て
洲ゟにも曲礼第一此巻の中に上下を立檀弓第二を上とし第
三を下とするも所得上下とするハ一巻としも是ハ巻軸
おほきゆへ之を列儀礼礼記第三正義云実鄭目録云又同
前篇以簡策繁多故分上下二巻ゝ又第廿巻にも上下を分故

漢書傳を模せし例
朱雀院の御ゆかりにわたりしれ櫛をかたち
藤裏葉まで六条院の事あらはし来るら
あつしくなりし[illegible] 靈運高選 任紫冊子
藤原なとこそしハさん多かれ源氏のかりかりなる
皇女賜源氏姓例
嵯峨天皇々女貞姫 正四位下 潔姫 正三位 全姫 尚侍従三位
善姫以上四人
弘仁五年五月八日勅賜源朝臣姓
醍醐天皇時女御正三位源朝臣和子 兼香 光孝天皇之女

醍醐天皇二女源朝臣 母子源朝臣巌子
宇多院皇女一人賜源姓
多ゝ亭とあのむつきとて
よひ人れりさて多ちより水のなかにたれむもゆく紅葉散多利
西山のみねちれそいにて
李部王記云天暦三年四月十六日太上天皇遷御仁和院寛康子
内親王乗輿也云三月十日御出家
ゆきなるとほくりてもみちゝきる
をしみまちてさくらの別のかけとりにてしはよく見なくかりき君か
みよいにきさへん

さうしきんとさへと身はかりうつりぬまえことなうらく
心うこきかうけれもれむくいんてゆかむ萬年うんいかになにかうかり
以根報庭来不二勝斗
これくちの風ミよ
人れむやのんい風をうわり孫とと子をあらふこちにおもひおうる子
これ秋の物字かち 萬葉巻よ六条院、
物語ありしハ秋の月廿日おまりにおりや
これ秋とも保むゆ
こゝもちいて中りて 年よりてといふ心也
故院の御ゆいこんの事とも御遺言也

廿日あまりに八納言中将なとなりにけり

六條院紅葉賀巻任参議 廿九 葵巻兼大将 廿一 貞信公昌泰三

年三月任参議廿一 安和二年三月廿六日

次了子
ゆくすゑなかはへの後さ侍るめり

それなるをきゝて わいうらるあまり

あまりいかにせむとはしく

すこしもろこそわかきんとれとりん女こ申ハかれなうにより

そなたへもやまかりしなま

うけたまわりかり小云かの宮中てれんとゝとをいかにすこしと

あわる今かまつうらうたるにかれ君と女よりてあとまおかりしく

きこえんハさまかはしくぞむれといふ程てまこしなさまをあ

む女れんとかそかれこれつひあり宮人かいくハされとしもあ

ひとまゝまなんへとりうり

さん今れわさむゝまむハ 嫉せうまんなり

あちなりてそしはとハ 嫗

いふ女なりしな 給なり

窈窕淑女君子善仇 仇ハ毛詩淑善ノ 周易曰君子以類族

辨物毛詩曰窈窕女君子好仇注曰窈窕幽閒也淑善

也仇匹后有関雎之徳是幽閒貞専之善女宜為君

子之好匹也

志らくさん　諂く　日本記

むかしハ人れん女いつハりおほし　平切韻云正也利也易也

あさきおやのおしへて本也

うけぬとも春もかよひぬこれ奏けり花のおりそハ花を立てまつる

いつはれしのいかさしいくあまかん女ぶ身にそゆれとうきとおはする

孟子曰女子生願為之有家父母之心人皆有之不待

父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰墻相従則父母

国人皆賤之寄言痴少人家女慎勿将身軽許人 白氏文集

井底引銀瓶止淫奔也

いへつかさ　家司

帝王母廷庭人争

昔とやうなる恋の人にハみなみ小半とも人まことなる深かはへあるまゝそ

ころあるまゝ

正三位源朝臣潔姫者嵯峨天皇之三女也天皇選

聟未得其人大政大臣正一位藤原朝臣良房初参

之照天皇賜其凡操超倫殊勅嫁之

延喜皇女

一品康子内親王　延喜皇女配九条右丞相生閑

院太政大臣公季

あやしうらゝくその縁ハしられたりやまとことの

私語 琵琶引 云 恨弃

いゆきうりあまちへりふりふとのとやおもいせきこてむ

かくてゆふさりくるまにてまゐりて御めのとをたのみける
やんことなき御めのとの人と
先ならはせさせておはします女院とならせたまへり
坊のとしめれ女院にていさまき給ひしかとも
いきよらきいはいの姿なり
すさく院にはれいのきさきのことく御めのとをおはしまさ給ん
李部王記云天暦六年八月廿七日太上天皇御乳
母加賀命婦告送云院御悩令請人申遷宮可宣之
由云月一日参二条院依御物忌立西門外案内之
云廿七日八九日御悩危急卅日暁以後頗平損

ゝゝ延々夜上皇御悩漸篤十三日戊晩上皇間絶良
久ゝ入夜院近臣皆御悩重由亥刻令条同十四日
落飾入道
御ことあれす
同記云天暦六年十一月廿八日昌子内親王初服
袴主上親結腰給其膳物従御厨子所奉備之朱漆
臺四本以銀器備膳同小臺二本以銀土器代備菓
子親王家献烏犀御帯一腰香法四巻朱雀院奉殿
上男女官饗其侍臣十余人召江徽南廂給酒肴中
宮職給禄

れゑりん之所なりけり　朱雀院柏梁殿

東宮故事曰後宮有素柏扇床也

柏殿有皇后所在所也　是九条右丞相曆記

三月三日侍朱雀院柏梁殿惜残春各分一字應

太上法皇制探得浮字并序

三月三日宴于池上蓋思古之曲水也指柏梁以擬　菅丞相

蘭亭間花林而栽棋木皆是好閑放楽無為詠風月

重勝節之所致之義也請各分一字将惜残春云尓

謹序　読畧所記云康保二年十月廿三日己未此日

行幸朱雀院入自東亭場就馬場殿御輿移柏殿挨

延喜聖代之例毎秋幸此院而柏殿焼亡之後御無

此事此而去夏新構柏殿至冬別作呈故設今日宴之

李部王記云天暦九年七月十日太上皇還朱雀院

處従公卿及非侍両馬助等給座柏殿西對

とろこれきにきれかさりどおほし由りて

嵯峨天皇弘仁八年男女衣服用唐法

れこしゆいよいよ由きおとし

まれ新多

太后御記曰承平三年八月廿七日女宮所裳着く

李部王記曰承平三年八月廿七日康子内親王初

着裳戌一點小一条大臣外舅親王結之裳滋野内侍理
髪尚侍結木結昂釵三品隠蓑物語云おほかとの侍
もみちのもき給ひしかはとなりのいゑのみなみおもてなれは
いと紫檀の螺鈿のこゝろとゝこしにいれかへけれはいまかはらぬ
ひかりてせうしゆかうきこえしとゝきの御はしめ給へるとおほしめし給ひし
なへ人しころおきやとの　蔵人所納殿納御物処なり
そんしやの大臣のれいひきいてゝかへし
着裳の腰ゆひとは号紀ゝ勘
ゆふらひりといふはつゝみかさねは昔は小櫛のなさひともあり
秋好中宮の御もき給ひしにはかたかけゆるしなとは

なれをこそとおもひしをうらみ
さしなきてる神もまつる万世とつきせぬ小櫛の御さしなかく
伊勢物語
わかの浦なる昔のうたやさしとゝめしなかれ小櫛もはすうなる
はしさしてうたひ給ひて　集　日本紀
山のはをさしかくしのはいとゝつれなさのことにおもひ三世こそはかなく
元慶三年五月八日丁酉是夜太上天皇落餝入道
李部王記云天暦六年二月十四日朱雀院時太上天皇落
餝入道
正暦寺座主権大僧都延昌和上法性寺座主権律
師鎮朝為親教師剃御髪運照阿闍梨勢祐已講為

唄師梁之変戒和尚羯磨阿闍梨とそあるを
はなういりけれはなるしかるを今はしとそうかれけりしひさし
くなりまりなをさへまうし侍しとれたるこ天皇の花しきりいう
さそらう行にも

太上天皇封千五百戸二千勅旨四千町
さすらかあれらとしおほく侍うて
我かせとは世のあれをと侍らいれ後の為さしいま為ちん
羽忠学
人の世の君ととそかしき為りいさふかあれらとこけかくまし
それ世の侍きれ君と　儲君
いかにへれ為きしと来し侍ふとせとなかちけるれこゝに為れ人

とえてひてさら給ぬれととし行へ為為くいおほうらう
忠仁公摂政
侍さうへそへつきふとおる政月日れそきれとは
日月流邁山亡不我与日月逝矣不我命吾
おほひ侍うち君まさんせうまて先さうまそそうれあらしれ
精進
まさうしむそ
内膳自西階供御膳其膳供精進物延喜御記
あるしいさきくれとく仮のすや或従あらし院法師れ
精進うましくれあらしれとく精をしいふれ
院のれまへそさむかしれうとはんかそれまち女と

棧香御術

まくれ人のからとにふとめるん多くいつるすととろくれの
つる人のなつかしうちほりゆうしおとハあるすいく方をあならぬを
魯平公将安辟女人臧倉者請曰他日君出則必命
有司所之今乗輿已駕矣有司未知所之敢請公曰
将見孟子曰何哉君所為軽身以先於匹夫者以為
賢乎礼義由賢者出而孟子之後喪踰前喪君無見
焉公曰諾　孟子
命なとを人乃なく方ゆえにふるし人のなこことそえ〻多くつる君
いとくしるなり　呪咀なりのかなふり

伊勢物語売家内にそあるこなからほつほとの内へとろう
きるうりなきのわ多よりおかりいもさんすや萬葉になりんさうと
むしと云男つしとみき人をうけへうちとも萬をぬなえ人う歌
といふなり
六條院
こしうららふみうり行ものとハ以賀也す
照宣公四十賀寿五十七条貞観十四年也貞辰親
王四十賀同義以外其例多以記曰延長十三年
十月十四日於西賜尚侍藤原朝臣四十算賀未刻
撤西庇障子渡殿西庇自南四間以庇西西半五間補
尚侍座南西

乙女之はゝ中将　後アヘサウ命名

正月廿三日子のひするに左大将とのゝ御方（玉鬘方）わかなまいり給

御記曰延長二年正月廿一日右大將藤原

朝臣来自院有仰云近間寂然甲子日朝摘若菜

奉入之廿五日甲子此日自院賜子日之宴ヽヽ内

宴記曰弘仁四年始有内宴唐太宗之旧風也正月

一二三日間有子日者件日行之蔵人式清涼記等

廿日注曰廿一二日之間若有子日便用之倚松樹

以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期気味之克

菅丞相　扈従雲林院序

十二種　若菜　薊（アサミ）　莒　蕨　薺　葵　蓬

水蓼　水雲　芝　菘　此中菘（アサミ）はなし是説あり

白河院よ松をなりぬるをは（入わかな）僻事なりと俗わり大外記師

遠は小大根なりと申しを承其説を用ひまいらすへし　舊記にこれ

芹なつなこきやうたひらこほとけのさはすゝなすゝしろこれを七草と（宗祇式目寄中に）　七種

蘩　蘩蔞　芹　菁　御形　酒々代　佛座

四十よりいその杖の海を賀すること是は初若菜をつくる也

と便よりて説あり古くより仁和の御時にさる行幸ありける

わか菜を賀給ふる事あり

乙女子はなしとてわかなつみのさかりにはいくよふるさと

放ハ　廂の若きやうにし或説云　右居牛也
かへさるハしらすハきそへ立らしるに十枚のさしよせるやうにそく
壁代　又防壁　地敷　茵　脇息
じ巻き簾上二条の小路のかへ小と倚小と立さうしとなるら
是ハ略しるのか
の記云延長六年（の賀）南の庇南庇鋪地敷二枚其上敷四幅帛備
舞踏所
同の記（茵すゆ）行幸（脇息すゆ　草子ちゝ）西向東宮座当日庇東一間皆用土敷
茵　同の記云　立蒔繪太床子三脚其上立沉香
枝息一脚

庭たんれ作りこすいふのこゝろたこしろなひ思ふく
螺鈿　延長六年の賀の記云毋屋前立二尺摩（蒔）繪
の厨子四基（二基納の比服　二基納の法具）同十六年の記曰立三
尺蒔繪の厨子各納の法服冬夏各五具
（香壺匣）かうこなとそのれくこれらりゆすりつさかくされこ
寝殿装束　二階一脚南（上置火取湯汁杯鑞中階唾壺打乱　筥下置硯筥一合次置磨櫛匣次鏡臺）
一脚北（並厨子二脚東並櫛匣一双其下並香壺匣　西置菓子其下階挿頭臺）
れかさしれるいふハちんしるんをれそのめつけしきあるやうをつくしおなし
衣ことを
一切のものをとむれあるをハあやめとしそ之定家卿の説なりさる也

此寺に月なとのおもしろきことゝてよみ 延長二年正月
廿六日の賀の記 南廂自東第四間立挿頭机一脚
有銀山銀水金銀花樹等
定めたるやうにあらく 閑(しか)籭(ご)
大和ゑにかきたるやうにてあらんとおもひせんとてあるおもひにあり
とあるは此なかにくはし
(伊勢物語)
よりこしあるやうわかみ髪をかうなる衣着たる君を見しかはわすれかたき
髭黒大将の五十賀の日脇の男子二人十二十一歳なり 是
とあるはゆゑありといふなれ
人よろこひてかなへる絵に春は花の旅のひ

上東門院より六十の賀をこなたにてせられける時よみ侍りける
法性寺入道前太政大臣
かそへしる人なかりせはおく山の谷の松とや年をつまし
榮花物語にあり
小松原末のよはひは今日よりや八千の若菜もけふそつむへき
春日野の若菜をつみし君かため年の数をもつまむとそ思ふ
おりあそひて後ハ行こともよろこひなくてはしめかなしき
雜役 (加)籠物 果枝 折櫃物
れうりもそへりとみえのゝある物なる
延喜十六年の賀の記云清中務丁親 上野大守親

王太宰師親王行酒于時右衛門督藤原朝臣奉右
命召坏屬給郎進坏飲訖除舞此記曰采女調和若
菜羹羹供進采女又以供進餘羹給侍臣盛中垸
呈中盤
さゝなみのひさしきもとりてなれわたるとのまつにかへらはなれになきふる
おほんつきこと〻　此哥
朱雀院のれのとをりかむ　此菜了　此絶也
かゝる人にはぬかにも　延喜十三年尚侍賀此記
云命侍従令奏絃者自弾和琴中務卿親王弾琵琶
克明親王弾琴云々不古楽人丰此等例記

わたつみのおきにたなびく一よの　行事なにかあらん
秘
かはくいろふかきと
上のれつきといはるゝ　因禅也
人々をちとくうきわたるもみぢにして　絶詞
和琴　和名曰　日本記　万葉集俗用和琴二字也
未止古止譜序夫和琴者依為本朝之哥器不載漢字之
暦籍上始自神皇下至千人倫之今云宴庭私遊之
時無不相携但至拍子暗習音曲不傳案譜云々
亦嵯峨天皇別考此曲傳之尚侍廣井女云々後頗

中絶兼和聖主深好神琴召蕪賀善門於階下習御
其曲左大臣源信亦同習其曲于時相校急有一障
哥歟左長此道仍遣右近少將良峰宗貞暗令傳其
手又貞親聖皇召藤原盤井等習此被時貞信保親
王家勅命頻作其譜也延喜聖主極絃管之妙其中
和琴左長定傳賜左兵衛佐藤原敦忠即習得其名
朝臣薨後天暦聖主勅命云謂式ア御敦実親王許
可習兼又右大臣雅信卿為彼親王家督源傳此曲
以降大納言時仲參河守經相越前守經家筑前守
兼後兵庫頭家雅定以範基宗朝臣皆相從傳之

不絶矣

已上右兵衛尉經尚注進云家

或説曰和琴の濫觴ハ弓六張をならべてひきならして是を神
樂にもちゐられけるを後に琴につくられけるとかや依て今も
上總國九海郡の宮ニ寺ニ文すゝ六張とならべて侍る
神樂料とゝそうしなるよりし事申なり　鴨長明抄
ちあとゝハとれをもいとゆるになりていゐるなとて云へひきゝ
おほくわたくすかれなし打
相和ちゝハいもうし的よの路のゆるなく
いゐるゝ人をまてゝハ下のゝ息ゝゝくゆくうりのかる弦上ハ上音

ふくまれたりとし

これらいはれやしてむかしの清涼殿のふくたいふくむい一の名あれとも

宣陽殿　西宮曰納殿累代の物在宣陽殿恒例の

物納蔵人所後涼殿納殿の御厨子納仁寿殿蔵人雑色

為以

ゆかりの人々にはらふめて

の記云延喜十六年三月の賀試楽中務卿親王太

宰帥親王左階下侍臣五六人又唱哥

かへりたる哥ふるる哥　反音　律也

あをやきあけひ行　青柳　律　催馬楽　長生楽序

拍子十一

こし月のゆくゑもしらぬ次々をつたへるを

年月のけしきを見るかは山の河は哥よみのことゝ心やすきを知らし

うちに後いり給ふ人のはゝのしかるへく

源氏の院号を得る後は入内の儀に准ずる所の入らは皇室内

の車よ移りし所は院の御方に給ひくれのしもくすゝ所の給ふことを

まいるよるひよる車せさせる

臣下の礼は書を遠慮はなつる車を寄礼なるといふ院中の儀ふは

此儀をつかさる礼乱左六条院をも人のことくあるまいるく早下

し行よりし礼

はるつ之　文顕

めにちかくうつりかはるは世中とりわき春こそ物くるはしけれ

貫之朶云女のことなどもいは

梅萩乃下葉つゆをくなどにうつくしう成は人ならんとす

王ヶ身同く此事はうちとききて

六帖
いふにかしおりよみ乃おもひしらぬ我身ともきさて人ならぬ

あはと雪れそれ雪れひとりぞ見るらく

めい雪の花ふるかとはのとしめるおりよ花ゆへん同様に

庭とはあやうしし

春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝ

なとのこゑ物思ひしらぬは昼ふかくさし続け

子城陰処猶残雪　衙鼓声前未有塵　庾楼暁望　白楽天

なかく見らるゝ物へあつるものくはるかなるすとて

ことに何の雪れ

後撰
ふりそめて友まつ雪はむは玉のわか黒髪のかはるなりけり

袖こそにほへ

古今
おりつれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝに鶯のなく

にほひにうつしては

拾遺
梅か香を桜の花ににほはせて柳か枝にさかせてしかな

なとてかくおもひかけおもひしるく行せんとてしもなきゆへに

笑也常にいふ言を記

毎人先非ふんで多れらは不いわれれされぬてとそれかと云玄と
はらこれおも表うにも成んちしてみとあり ときしくとの
はう那しときこ之年う古りてもおりかうなとしと孫わ定
てみしいふやうなり
むつはされうへかと何せうろてあり 竹葉と号自

此頃

うむきぬるこれ世うり残んあい此ふ人ちれなりしうちきそ
古今 世れう紀めえてはいろちへかしこんおりふ人うほしきかれ
二條の家 勝月夜 尚侍在時所 大政大臣旧宅

んれとそんなりてしくらうしうる人本集とし
すな紀名ちと人ふかいひをてありぬかてしん那とていとこ年つし
多らふしこゝ名いふなりに
古今 むつかしれ多ら小し 我名をはなふこゝろしふしとそきわすや
出のしは多のとうとえられたる一かく 和泉式部也
和泉国名所なりとそ
多りとにありかとされて見てそ
書れ池の玉章よりそふ所多れぬしのいとうき定とはる
平ちうかよすうす孫とときこ宗像とある
平仲定文母小しとふいさしお内えんとそ詠れ難よあ

とゝまりこそせね紙ゆかしてたくやまをとこ山にはなつる

末摘花巻

陸のしきれとおかつきこえぬわたくゆきわかくちハなやくえふき
（注：行間）
守人のかはしハさけしわかさられ関をとゝぬねわか陸奥れ
たつらしとおもえとねりのとこりよ海をなもあけつへき宮の御辰
はりよ陸も又とろこき名ハあちぬても人めてかゝれ世にはまへて
（注：行間）
ゆはさやしなかうさことたてぬあちらすはもとハ人も見えしかは
立ちきぶえとるもろ下なくさしめてにこらはふんくうれく
（注：行間）
関をとゝれか夢うつぬ夢ゆくこふや
人こそ見ぬ我からはしらぬ関守ハなれてこにうらむし行るらん

ありしくるもけるよ
（注：行間）
見つらもしとゝあのふんぬくつらわしよりもたに地れるしまく
むりしとい陸わしゆわかえハ行らに
（注：行間）
たつや見川しつれてこまれふうをわざとらに見れかかる
（注：行間）
あかうくれやまなうんこあまてに青葉の山とうら行る
（注：行間）
水あれえゆ夢とかゝれと萩の下えもしやてまことうる
（注：行間）
わかあハうつしらりもう水なれあそとれらのつくえまは
（注：行間）
青葉の山（臺）山は若狭にいふ（国）にハ入る校国名所補抄よそ
陸奥国或又尾張国にありとある 但し山まハ昔あらくあかり
夢の浮橋の山をいふなり 夢浮橋巻にもとえて夢の六帖にもし

其文云
東宮のはかなくならせ給ひにしよりも
東宮の母女御の御なりて古今に二條后と五宮の御休所とお
はしまして東宮の母御休所なりて
おはしかくしも思つ侍哉これより後はかなしきことはましと
我君しなれなむよし野に君しまさはかすかはるはくたよりそなりぬへし（作悦）
是母儀源氏也（先帝皇女）以京極の娘とまいらせたまへりける秋風寒み
御七月にかくれさせ給ひにし後のほとに悲れるかなしく成かへり侍く
やしなひたてまつりて侍
延喜三年十月十四日是日於西方賜尚侍藤原朝
臣卌算賀李部王記曰延長四年九月廿日京極御
息所奉仕法皇六十賀延長五年二月廿五日淳正
尹親王為民部卿六十賀於桃園宮設法會奉寫薬
師金字寿命般若心経延長七年九月十七日左大
臣諸息四人共於法性寺設五十賀所會其儀本堂
毘盧遮那像前安置銀薬師如来像天暦三年三月
十五日右兵衛督師氏卿為大相公貞信公七十賀
於法性寺多勝堂修此會七佛薬師像寫金字寿命
経七十巻已上李部王記
ほとを経てこゝらたれその人

はいまうりきやうこんかうみやうさいしやう経なとし

最勝王経十巻 題目金光明最勝王経 金剛般若一巻 題目金剛般若波羅蜜経

壽命経一巻 題目佛説一切如来金剛壽命陀羅尼経

廿三日とれはこしきれ日にして れ前試楽日なり ことしは

一説日は年流満あるとハ早見のんなり

ときあへ(す)行く忍のあめふるみれをれはちうこれ紫し

置物机　唐花末濃覆

ちんれをおきく　沈花足なり

うしろれは屏風四てハ式アてまかんなきや紙一首

いまうしてまいの四季しまれ思なれとし

むかし物語にそとのえはせらとうしこきますにハかろく
行けゐ女達

孝経曰明君之故設利以致之又曰愛利俱行衆乃
悦史記曰堯乃賜舜綌衣与琴為築倉廩予牛羊五帝
本記又曰帝紂乃囚西伯於羑里閎夭之徒患之乃
求有莘氏美女驪戎之文馬有熊九駟乃他奇怪
物因殷嬖臣費仲而獻之紂々大記曰此一物足以
釋西伯況其多乎乎日本記
孟子曰大夫有賜於士不得受於其家則往拜其門
陽貨瞰孔子之亡也而饋孔子蒸豚孔子亦瞰其亡

也而往拜也
うれしかられ左大将やまひしてしきり請なを
大納言安部安仁 天安二年十一月十七日依病辭右大将 同三年四月廿三日薨
大納言藤原道明 延喜十九年八月十三日依不上十月三日 勅授帯剣同廿年六月十七日薨
又中将をもしうきを請て 新儀式云蔵人又奉仰先
書定可造仕之調度本用途物召内蔵寮穀倉院
天皇奉賀上皇之算儀也中宮の算をとりさたしぬ
左大臣おもし大納言二人中納言三人宰相五人
公卿正員太政大臣左右大臣各一人大納言二人
中納言三人参議八人 合十六人

之記延長四年十二月十九日 壬午 奉為太上皇息
災延寿於京邊七ヶ寺南京七大寺 東大 興福 元興 薬師 西
大法隆寺 大安
之誦経更其有拯用絹六百疋布千端云々
貞観十二年遣使於邊京卅ヶ寺平城卅ヶ寺修轉
経功徳銭寺別有数賀皇太后卌算也
四十の賀といふすいさ紀くしきて仰なのこうれよろこひきさしを
あやうんとくつうりも海を
仁明天皇四十賀卅一崩 天暦卅二崩 東三條卅崩
右大将定国 延喜六年行四十賀同年七月薨 是おうさ之

のちよるへすまと　五十賀の事なり
大饗に亦は入てここらにはおのれはしろくひはむきての四位
ぬらら若きもとし人の殿上人の中にいふきぬりなり
六條院の賀を中宮のとりて行なり　大饗とは中宮の
饗にかはる人の見るなり正月二日中宮二宮の大饗也
とのすれ
大和の記　兼平四年十二月九日の賀　人これをかんなちめには女のよ
それ寧相よりは左大臣の
名所のきさおし　ことの名録云　韓将　落花形
亀無也を有　鵞形　雲形　鶏通天　鴛通天

ちよもとかいてくわえにははのきてころもとまよ
催馬楽序曰
むしろ田のくはいのまき川よ座ましる人のかみよかはに
やしもはれれ所をしいる鶴のくちもとをかよくてあれなれ
ふいもをかいてもわれまきあへふ
又枕にてとあらくおはしをたまへとせ中のみてひなり
むさしにてさも行やしくさしいふひや行
吾君在位已五載何不一幸于其中西去都門幾多
地吾君不遊有深意一人出兮不容易六宮從兮百
司備八十車千万騎朝有宴飯暮有賜中人之産数
百家未足君一日費吾君之来兮為一身君之不来

為身万人　白氏文集 驪宮高
しはすの廿日あまりひとひに　御記曰延喜十六年十二
月廿一日中務卿親王奉為院御算賀奉寫壽命經
廿日於仁和寺設法會
ならの京の七大寺にすきやうしてぬの四千反このきやうのこゝの
四十寺にきぬ四百疋
李部王記曰延長四年十二月十九日内裡奉於六
條院御六十賀誦經并供七大寺合布六十端進京
七寺絹六百疋則於朱雀院獄贓給初依例奉仕御
賀後自院有御消息停止如故是る已

古今之内侍（満子）のかみ（内大臣高藤女）右大将藤原朝臣定國の四十賀しける時
に四季の絵かけるうしろの屏風にかきたりける哥
萬歳楽れんよ楽人のひとそうらうて
ひにしれ時いかりふくへいらる　御記云延喜十六年三月七日試楽
吉つりの床子時未一刻参りて三行了参議保忠朝臣率楽
人參着庭
まんさいらくはしやうといひて　万歳楽拍子二十新
楽中曲長妹宮横笛譜曰本是舞七帖今とせ舞五
帖舞出入用調子隋煬帝作
このれゑんしやうしてらくろひとすいへそしゆかしく

落蹲南宮譜昔舞此曲者有伴田麿古楽小曲御記

延喜六年十一月廿日仰云　先奏万歳楽次蘇合香次皇麞

いりわやと　舞有故綾手故曰入綾舞入也

かなしところなきなり

その時狛近真の家と小段取し号是ハ己陵王以後之但日来

狛近真相小段不列為そうましていあとうち各へ陵中の儀とぞ

ましい張ハぬけあそそとよのことなくとのまゝる乱陵王の

始となととれとしくけんれ但以京とうるりくな拍のまし

又しけるみや覆敵ともさるやゝありてあるなき張風とええず

然右小段取れ号為従可かりけ之

こころくなきなり　取々饗

はかりれなうつくよ　宿徳

の屏風四帖よまうられはてかうせ給へはうるはしきのうえなしかし

なきはかりなし

綃の屏風と唐綾にてかけられたるハこれ

なとなり新儀式云母屋四間副小障子立障和絵歌の屏

風一帖　御賀天皇御算所

延長七年三月廿八日大臣の紀曰かなたれのけうと實頼

中将ゆつり仰つまり四天屏風二よりはれてさらにあるまし

はり七絵

桁達梁右大将定国四十の賀するに内より屏風調して給ふとゝ
ときよの御遊し記にあかすし
清涼殿立物の厨子垂楼　寿宮記柏子　箏篥
第一階壺並掛第二階 右笛篳 左琵琶云上　横笛 横笛
第三階箏第四階和琴 狛笛 柏子
其物とハ両よ並へし先羯鼓　次鉦鼓
六色の官人　六衛府 左右近衛府 左右兵衛府 左右衛門府
延喜十六年三月七日の賀の記曰左大少将諸清
門依馬寮助木引の馬十疋奉覧　延長二年正月
廿五日同の記曰左大臣起府院の馬被奉入仰令

早卒大臣播唯下殿仰之分の馬卅疋入自日花
門時酉一刻
かくうきん　賀王恩 大食調曲 南宮譜云 柏子十六 古楽中曲 可弾六返 舞定入用調子 合柏子八拍楽
延喜六年 五同十六年の賀共ニ賀王恩万歳楽有由
の記よ見えたり
のとゆりおるをきゆうらこん一二の古紀二所あゝきてしるん
ねこ一ならるはかゝれるんとをきし
唐手本也　梁書曰西陽王大鈞字仁傳年七歳高
祖重之賜王羲之書一巻　延長十六年御賀之時
内の御引手物硯袈の手紀一裏琴和琴各一面一

牧之々
又延長ノ安に横笛琴箏和琴琵琶取一物名有甚
袋笛着松枝ノ内列定物也 見ノ記
大臣日記 永平四年十二月九日ノ安 おとこらゆゑ行ひぬれとよ
材流ル箱一よろひいまうらせん無いのれてもお薬とも
御小ハ东ね海まさまとしこと一云々
れるとなむ云ふて右の流のさとしと海のくしてのこ所
延長二年正月廿五日ノ安ノ記ノ馬ノ定之好主
殿率炬雅楽寮入自日花月花無門東西相立所鳴
門前 附酉三刻之

こころをえて 案花拗絶又上一条門院おゆる居まて返
そこころとつへけむ 行あ
よしあきらうして なりてなり
首はなよとゆふか所あら人いつくしうるはしくこむ給せる
首晴し国花の文の之 文選
各例律曰年七十以上十六以下犯流罪以下収贖
八十以上十歳以下犯反逆人應死者上請九十以
上七歳以下雖有死罪不加刑疏曰老少之人皆少
智力但是被教作罪皆以前犯之罪坐所教令者
於こころえたとへおはしまして

明石中宮々上后東三条院女入道惜磨守
女皇太后宮漑子 醍醐天皇女 内大臣高藤女 母交野
大以弥益女

さるへき人々うちとけくしゐたれく

人々産日上下着白装束九夜改白装束後尋常也
九条右丞相記曰女房ホ各着白裳唐衣 冷泉院降誕
れむゝ之中ふ知りぬべき一家 勘仙湯殿日时已在七ヶ日番左之読書明経化待 鳴弦以下五く
少将侍尹乳母大和奉仕御湯殿依此女能知此道
也故平中納言室 菅根朝臣 奉仕御對湯
七日夜内よりうぶやしなひのすわりれさく院のくく女をとす

てなりしまうけのやうかんとこゝろよせに人々もしらぬを出て
めつらかなるさまなりけるとそれきよろこし

新儀式云皇后有御産事光宅還中使被奉問之七
夜以内蔵寮人之設饗饌有賜禄 或殿君流設長食也 女御更
衣産所七夜也使賜物　九条右丞相記曰戌剋蔵
人及有相朝臣為勅使有給物絹廿疋綿八十屯 白三十 赤五十
綿二百長絹布三百端件給物似過差朱雀院中宮
内裡蔵人所式ア中重明親王左大臣右大臣大納
言藤原朝臣顕忠左衛門督源朝臣高明大夫藤原
朝臣師尹治ア卿源朝臣兼明亮源朝臣雅信権亮

藤原朝臣右相一品唐子内親王女也
ゆことれおはしまし八祖母君
おもひ君もこゝろにかけていつきゝこえ給ふ行て
源氏物語若紫の巻にもとにそ日ころ申つたへたるを
殿のいりけ物語中にけるおかし 載之明記
うつし 愛 梵云 蘋迷盧山 唐ニハ妙高山 夢ニ
やまうつしれしれ山とこゝろ得へけれは山は日月
光をやあはしくてせを見しれこゝろは山のとよみえての
てりみえよみえれ
拾遺記云帝俈之 帝妃曰郊生子帝王年代暦曰晋

懐帝時前趙劉聡字玄明張氏夢日入懐十五月生聡
日月夢㕝
推古天皇元年癸丑正月法興寺を立四月厩戸豊聡
耳天皇を立て為皇太子万機悉く委ス内外悉奉
也始之四天王寺を建立二年甲寅三宝を興隆して
ちを競告日六月十五日夜の夢想にて頂上寶を
着し吾之海を出法俗形にかりし西の大宝蓮華
にしてあまかり行て左の手に日月輪を見上て光明を
放ち吾手に黄金白銀の七寶の城郭ある皇子所
領城との吾まゝにすみ給ふ 其行る海上に三寶を興

給ふ天照太神宗祭色てまゐり給ふしこれ夢と云て候
則夜半に上東門院を召つへ色てまゐりてはしめとかたり申給
太子太子聟最て月讀明神の前祭前を急ぎ給て七ヶ國
の内七ヶ郡を點定して此厨に奉寄せしめ給ふと 見懐中抄
第五御位に二位新中將皇后宮定子によりて無程失せて
此地絶たるに中宮には此たりもまゐりて程なく御産あり
かしこれ子を給んとおもひ夢を見て御産ありと云々
雖為吉夢地其人不幸事
大鏡曰隆家卿は舊き朱雀門の前にて左右足を東西の
へ差出て小路ゆく内裏をいたきたりと見し夢と伝
おりさせ給ひは此前よりの夜さうしきに女房のかたりきこえいかなれ
まさしくいとよろしく聞えさせ給ひつゝんとかくしたるに故に中宮の御子
孫たちへまし給ひしとも其後あまた給は攝政関白にし給へる事
もかくまゆきにしたまひしには其かたの夢を見給ひけると又内大臣
んなどかなしかりしと夢としもにつきすおほく侍らは
周礼云夢中有正夢無風雨之夜無慶喜酔之時分
明為正夢　漢暦曰後漢明帝夢見金人已遣中郎
蔡愔等十八人往於西城尋訪佛法至天竺國遇見
竹門迦葉摩騰竺（蘭乙）蘭等二人經負白馬乘蔡愔等乃
求請之以共愔等還涉流沙至於洛陽立精舎今白

馬寺是也 私教類聚 夢々と信へき経紀論文律字乃好
れるとも杯ほくハ夢をおしとある文佛本行集経云摩
耶夫人白象在胎入と夢ニ見ゆ浄飯王白夢乃波羅門
とめて問ましくハ答母人夢見白象入右脇皮母頭生子
三家在夢ニ浄土祖師善導寺和尚記経疏ニも夢と
りて化定せり
ありて西かた多十万億の山ふ過てたれ
従是西方過十万億佛土有世界名為極楽 阿弥陀聖
水なさきよさきなれは思ふなく
漢書 捩撞鄙牧居于辺地水草遷徙

大鏡曰院より衣に表て給 冷泉円融不審可勘衣なとゝ
見いつかおもひけるをとてとりて年つもるも嫉なりもをり
をし
ところ々浦二葉なるに君かくおもひや猶ほなかりけん
いかにへり人はなときさんなる衣かとなるよ座つき給へき
襪衣
こゝろはつもきよをのとおほかりて 變化是
中化生れなん
ほとけはなにおさしにいなりて 婆 娑婆到彼岸也
梵婆羅密

ちかへるはこよ常にこそ　封籠
よひをまつ身とは然きかおほろそふかきをし
薩埵王子飢虎に身を施し給ひしなれ
身をなけそ谷に入給ふ我さまは熊れ（?）かりてとなれ
みなゐ縁にひかれてし　妙高山れ
はしきすは隠りゐて　辞いと隠に之
なかなき山のこもりゐられてかとなりて給ひし
郭公嶺の雲やまりてふしわりにきけることなくもとまこ
かけれれことはりしき聞し見るふこれをとはなとし
かるる者は閉しこもる我身こそつまされ隠れの身とぞ沈るなり

常在霊鷲山の心なり佛假滅度し給へとも
常住不滅也といふ心なり釈迦如来は佛
涅槃は有也佛は夜滅度如薪尽火滅と説給
これは孫来て此山里なるへし
さる人は念と来て此奥山の涼しさを人は云なれ
かはせんせんかうしいふかうてわりかなきいさしとつかてかな
やきぬりさりてまつり給へはほとけのみなたへありて其のちく
ひかくたえこしたきなり
忠文民部卿将門征伐の大将軍なりけるに勅賞の定あり
さ苦と成隠居公卿疑しきとかこちてまことゆに

内閣文庫

出うちとかは名連相刑の起しおとハ結さ連雲の起
しあるとハ結へしてうわをしてかくれとを結ふさうと
ありあり蓮歌ふ民部卿右連相ふ参て畏てやて富
家の奏録をあかりあり家よゆうて手をふきりて立
うりあり十指の爪平のうちゆくとつて血は紅をさす
のうたうゆく足元ふありやって悪霊となりて其故
あや清隠公子孫ハ主客して成て小膝をと化家ろ伝へ
ありと　見聞記
落ぱすれ
記ゆさく　流

久しく行へ答
ゆくわれぬるぬよ母子まさてとやさしうりし
耶輸陁羅ヶ帝子ちられそぬよ無跡うちてわりんうれをあれ
記ふ奥入云雖有此説從據不知雖從頭几佐り乱ると
かうち人　白人
ゆうとくおりはしてこ之行蹤

劉向列録蹴鞠者傳曰黄帝所作或曰起戰國時記黄
帝蹋鞠之勢也以練武士知有才也今軍士無事得
使蹋鞠有𦐫廿五篇
元興寺本居住 旦寺ふ入うる槻木ありて連とかうらして天

智天皇内大臣鎌足入鹿とゝもにて此鞠あそひする処喜云
年三月廿一日此記曰暁以後待殿前令侍臣蹴鞠
覧之同五月八日仁壽殿蹴鞠五月廿二日殿前十
三日常寧殿有蹴鞠興
ありして　興
なる木ともとかゝりをもて遊ぶなるに　蕭茂
いろ／＼緑なる木をうゑ
かゝりのひとつのもとより
朝夜日高尋梭　夜行沙原晋虎忙　ヨク朗詠
とりの中ねりしたふはしに

中階　先例未勘京極殿北南階の間にて見證之二条殿階半分
鹿絡之田見之隨分を例定有其故乱云し
花足多りかゝりくらゐなりやけてハおさてもしかり
なし
此れをかりあるハこれ其ハ揃をよきそれちらさるらん
落花狼藉凡狂非　麻ミタリカハシ
其外ひきそれなきみてろはやしらん
手向　舞礼　又手蔡　又享礼　以さ袋ハ先さ、
袋なり　旅速云その上ゐかりき始人のりしるひさをいとひ
てあくらに入く候ゝかれとて
あさりぬちこりもとゆこそふくあしも氏朝をとみへりむる

後撰云 あひかたらひける人の家にまかりて侍りけるに
ぬさ袋をしつけれとて
秋の色にとひつるらんしらては 今宵の月はさやけし
其年の比はひの事 今度は其の年の事にいつまでと
いふぬさとは旅の手向の事は其の神の名に手向る名也
まくらか
かの猫に 新王案曰 猫似虎而小能捕鼠為粮 音苗 和名祢古万
此手をもちあそはしける事なととも
うつくし 工因ゆつる大臣ともの此方にありしこそきこえ侍る まかり
思しなからとりかへしはやともおもはしめかへし かの猫を返さる

又
かはらぬ世のよしみ 内外用そあらん
家の風さしも吹つたへ侍らんに
久方の月の桂も折るはかり家の風をも吹かせてしかな
折しもあらて又も 御返し 若
深山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花の色にうつらむ
呼子鳥 万葉集には 或喚子鳥呼子鳥は箱鳥の一名也
深山木のことはとまりて箱鳥のあはれはつらんまとも思ひ
あさいくたひも箱鳥のなきわたると君にそ思ふ御とも云て
雄略天皇御製作図つくりて山と云所に網してみやこかと人をとらふ

人の婦女をおいて山中をもとめて鷲にとられて其こや
とらひしめて死ぬるさるゆへなむとゐるハ云也そこにハ
ちやうし云也
これ世の中ふり多りしいたく　若病也
ありき定めらちよ　養左深定人未識　長依寄
風よさそこまてく見ゆるきかりをとけいりて待しに
見ゆるこかりけるハ君取ぬる林をと汎端ふかたく念也
風のきれとともかりけるなり
応徳二年三月十六日中殿宴　京極大臣
あやうくきてすもろかめくりし侍りき

伊勢物語
見しとわけねこうりたねな花飛かしくいあやうくまて堂やてなるらうさむ
まいれりく　例の書也
はなとろしふかをとらん
義孝集
ながきはつゆをかしみをはなをもと移ふかる春風ひしき
いかにかに花さかりいくらう山桜をまてね枝にくりかへこそて
しらが
白雲とえゆる桜もある花をたまつね枝しかりくちきなん

若菜下

此巻一名りんかうと云と
おちくぼにてのりゆみのまへに寺にあらん流所用と
おしいりとハ殿上へとらまほしくといつゐかうにまへはしくかう
殿上のゆみのゆとこさらにさしとわりしとあるまて　三月つこ
れこ後宴日なるまて八

西宮抄云殿上賭弓前後頭並殿上五方人取文
不依姿改云　小壁四方中懸便所名為お居所にて
設饗宴傍御於居奈内卿除事右文作ヲ主上れ
射場射手着座王卿依右定方人参於居令懸的
矢取渡的付着座籌判着座右方に加被作度枚然
人賭物王徒射勝方拝王に以下王徒射錢定懸物
上に下所掌令各分前後取掌着的座次に射弓之
有中科人云
李ア王記云天暦五年三月十六日殿上賭射忌月
ヲ賭弓
これ浣ふてあゃしとひわるてし　的射也
たるれ大ゆるこ源氏とらひふて内にり行へてたとゑちなと
それけハ次ゆかり
こゆとして原しかとしらハいくたれを申すて源氏ことともありはまてん

歩射　騎射むまゆみ　歩射かちゆみ

李太尉歩射法云夫歩射以自先須其持心射也今
案持心者的名乎

文字のへたてより見るにあひて二まとりにかへしけく
弓矢前後之　指孔　合手とゝのふ家也云々
まとゐせしはしめつかた風吹て
ちりのしに春をとなりわきてきたるところにとまる花の上には
あらしの吹くもそれともと

西宮抄云騎弓注進録自売倉院色　出題物差人於俗延云廿一是取被也
女装延長四年中被出女装

柳の葉をもちあひあひつゝ弓を射つゝゆみをひきしにはいな
むかしのゆみの風によりしまてはたとえともたかいたるをは
史記云楚有養由基者善射者也去柳葉百歩而射
之百発百中之左右観者数千人皆曰善射
人なてむつかしきあはれには
古人詩冊桃熟ならしはふいはしの魔張しろいあら浮世は
てむつかしきは人ふかやそへるまもしきとふれ
ふかくからい行へ所有をあはれとして
岳論　乗馬女之官之外行へきさう
せいし行へと　啓

あはれしきをつかのねてこより　如案
冷泉院
うらはれ猫こ
寛平元記曰寛平元年十二月六日朕閑時述猫消息曰驪猫一
後大宰少弐源精秩満来朝所献於先帝愛其毛色
不類餘猫〻〻皆浅黒色也此独深黒如墨為其形
容悪似韓盧長尺有五寸高六寸許其屈也小如粔
粒其伸也長如張弓眼精晶熒如針芒之乱眩耳鋒直
竪如匙上之不揺其伏臥時團圓不見足尾宛如堀
中之玄璧其行歩時寂寞不聞音声恰如雲上黒龍
性好道引暗合五禽常低頭尾着地而曲聳脊高
二尺許毛色悦澤蓋由是乎亦能捕夜鼠捷於他猫先
帝愛翫数日之後賜之於朕〻撫養五年于今毎旦
給之以乳粥豈啻取材能之抜群因先帝所賜雖微
物殊情於懐育耳仍曰汝含陰陽之気備支竅
之形必有心寧知我乎猫乃歎息挙首仰睨吾顔似
咽心盈臆口不能言
おきてゆくしれちまうかやと
こまもしれくぬむしれ契れとおもふくはあさましきこと　和泉式部
古今やは　式アつ宮　紫上文
見ゆへし　悠言　世礼　取蛇尾　元字

内親王かくれ給をおふによりて十八年になりぬ
ほきの若とうつり給へきみことをかはりまゐれ
仁明皇治十七年 承和十四 嘉祥三
十八年みくらゐをさり給て年ハ新帝の御守になりつき
給へり
清和天皇 治十八年 是貞観 無継嗣例
朱雀院 昌子内親王 譲一條院 章子内親王 馨子内親王
おとくろやし給てありつくなさかりおはしさせ給ひぬ
依花菜儀脱履横延喜之例 李部王記
こしかたさまのかりあるとをもんなるをもおもしろんと

東観漢記曰王莽居攝子宇諫莽而莽誅之逢
萌謂其友人曰三綱絶矣不去禍將及人即解冠掛
東門而去
後漢書逢萌字子康北海人掛冠避世穡東陶弘景神
武門掛 去
左大臣なりける給てそ世の中のわたりに依りかへり給ひける
粟田関白 道兼 于時右大臣 懐以綴
とかくしかれとちしてもとにてかへりたまへり
人のなりにけり
原氏ならつきにいはへきとよ人もあるに思給へに冷泉院

大炊御門南二條北堀河西大宮東四町累代後院
也後嵯峨上皇御宇此院
栄花ニ源氏のうちつゞき給ふ御代にハ春日の神の
御こゝろにかなはずして后なり嫄子中宮の時のまゝ
世頃ありしが此門 冷泉院にておはりまし此まても冷
泉院とてまことしき
御いまだなし 徳イキホヒ 文勢
めでたき人のこゝろなくして 瞩タん
色ハ今そいかし氷かと見えしのもりならぬめ也 今
人のたゝ此なるよりも心をしのぶこゝろごとの人にも行へき

ふりし後二人なりしを修司の御みちかきとをしらる
加倍従二人 色修司例可勤
人のこゝろさ後 御ゆるさ後なり
十月をうの十日なる是は神のいさきにもらの色かはる松の下
葉の紅葉ふ色をとらへ心をわきときをねらひなり
左ゝ天々
手早振神のいさきうるふ山にも秋にハあはれなる心に來
一説云松の下葉の紅葉の下廻紅葉也とて下葉んへらん
とに後と私と
紅葉にたかひとの八代山ハ吹とも色ものにや嫁をまきかはらん
為藤
ふらし未に後りうらしはろしまもわかまかりの三人なれ道ゆふへ

東路 琵琶也

うらわたる浜ひやうしを清ことたまてそれ人とうとうとく

琵琶はうち物とそ拍子をとそのへはこゆくなり

やすみあひれも浜行ぬなしハ　山蔭小言之

飛鳥 旅路
ちりやなるひしれ松の枝ふつもとこちなとやらんと色いろなし

ふかいとなきころきとのこ流れさる人かき緑のえひえ乃の袖をぬき

ふひきりとるりし身ちに乗をすいふうきしわとの艇うきしもうと家

おほやうりかさしてのいくとある

萩梓頭事　人長すも之尋常にハ桃をとりて之似須易雲れ　の琵琶の試出桃橋家みそかにかうろしけうまきう萩の枝をあそう

ぬかとうりこかれねこハわさいくし行ハれ

君所唯聞堂上言　君眼不見門前事　白氏文集

身うもしうぬわそんれひしれかさへといいにも浜雪れ船とおらし在まハ

まうなれにろうを行忘うしふやしいよく多けりうらん女の是非

人ぬまをうりゆ浜桃案すゆふうきをりかなふくさ在の露

浪起秦田行變論　花開月令不依春　對雲琴　野相公

今案古人尺犹比詩偏不相叶　或人曰　野相公称之

ひしれやまさへゆふろうをそうとらし家えてくしま勢也

記りうまハ琵琶のいつうもろふしひしれ山しへゆふうくやう

是ハ文時か奇なりの行

小野氏系圖　篁 仍任宰守 男 奏議 乃大弁 兼和云

年配流隠岐國千時東宮学士刑部大輔七年被召返八
年後正月五位下十四年
正月任参議同四年兼弾正大弼仁寿二年薨六十七
長六尺二寸或云破軍星化身云々
このうた　歌子
ちとハいよしありてわしと思ふ色多くして表海くもひすれ
りけるかくてありて　篁朝臣とハ行ひき
龍色あり　或説を行てあハせて無居ちとぶ
篁朝臣語曰
わたのはらを出ハしつかなる海やかなれ

いかにしてうらみをさしてわたのはらやそしまかけてゆめ
たゞのゆめの後よろを好んさいくし桝をとることて
神采有千歳宇奇
きむさいせんはいさいやちしやれむはいや
ゆむさいかんさいまむさいやよろはれゆんさいや
ちとせと一夜にうき海のあまふね
秋のちれちとせ一夜りなやりととに殊さくなや候らん
られ表かなきちかとさして
四位は黒　五位緋　六位緑袍
せんうちれわしまとなさいのかうてをしゆかしの物とさいはとて

れ數ハ両よ張ら紙もたてれハ紙色もうすく也
きしこちきり 後言 うしろかくといふこゝろ
えりけさらむとかへり 禪尼
かの入道の母なれ見ぬほとかしこき給ふ人なれハ
世をおさむる道を本としかくんあるまかねへきこゝろなり
長恨の哥傳曰 男不對侯 女作君看女却爲門楣甚
天下ノ羨慕如此
甚秋のはゝ行幸ニ 春秋行幸朝覲 礼記曰 春見云朝 秋見云覲
孟曰天子適諸侯曰巡狩〻〻者巡所守也 諸侯朝
於天子曰述職〻〻者述所職也 無非事者 春省耕

而補不足秋省斂而助不給
二ツを成してれあらしまいら 二ツ 親王對百五十戸位田六十町
内侍の臣をもつれ君 宰府 帥 雅之別臣
これらはそれらとしるしらてとくらしなやし
おかしてとなくれれかりあくれてやまれ海をもれたまハい
齋 イモ井 日本記 白氏文集曰十三李夫坐對山唯得無更
化人間齋晩往々聞鐘笑一食如何不食聞韓康伯
曰洒心齋防患曰戒延喜式云 齋稲件賑 齋宮
寮菅家御集曰紙裏生薑構菜種竹籠毗布記齋餚
人はんもいとをいりて 人知ん人朝イ

去アでミやれらうハそむうーり　童孫王
おりしうき大ミくとも思ふへくよれおそかける妻
ほしきれうれさむきゆうきと云れへ侍て
見うふれなるへきてれうさうと
琴之大曲也春ハ角夏ハ徵秋ハ商冬ハ羽土用ハ
宮也律ハ寒呂ハ温也分請湯語五音語曲也蔡邕
女訓曰舅姑若命之鼓琴必正坐操琴而奏曲若問
曲名則捨琴興對曰甚曲小曲五終　絃　則正大曲三
終則琴有大曲中曲小曲也　比大平記覧
尚書曰聲依詠律和声　声記五声宮商角徵羽之律　記六律六呂十二月ノ音氣之主為依声律以和樂之

いとをしとゆしちんするいは海も　由操桿〽とあそ　手仕之
又月ハかりにそう行へハ猶まさみしにすつきて
宮女懐姙者散斎之前退出有月事者祭日以前退
出宿廬不得上殿其三月九月潔斎親王退出宮外
物忌令
十一日もくしてハすいくう行へきれせしこ　十二月十一日　神今食
冬の夜の月ハ今まをいてゆく手まふ
枕草子にもさむしきものしはすの月よとあるんと
女くんミきかん　左傳襄二日鄭人賂晋侯以女樂晋
侯樂之半賜魏絳史記曰孔為政齊人懼梨但乃選

府圖中女楽好音八十人
御記曰天徳三年十月十九日召内教坊妓女十人
令奏絲竹
あをしれうらふく　又云五位装束也青衣夏也云々
青磁是ハ茶埦名也られ名を似よろ細也
楽之襌子ニ延喜三年正月十四日踏哥ル記曰哥
以給織舞人紆裾召人　蔵人所人木給襌子云々
うちあふてゝあをうて　装束うちてあしを結ふ
おほく　いふら服とそれいはいきハ略儀也
あをみやうきれつけと　書冊万葉よあをふようしとと

いつり
菩薩不れ出あをそあうらを給ふく出家は給それあけら
きうはれとやうらうつ　一従緑書　うつ不地絶
春のあふるとつゝへハあをふ　柳をそ表うる云々
よんちれあくろ　絣地袋
鶯はうふつ風ふしつゝく
花のをとれの従てをうへてゝ鶯さそふ立つるハやる
鶯声誘引来花下草色細留坐水边
いちうちてふれうをようられそとあそて
發絃箏調子絃也以調以三為散盤涉調以五為散也

これはこれまてならひきたることなれとこそかく 直衣

ありきはほかにはとおもひかはすてておかしかりき

は殿上上﨟の心はへ式部卿を始古の労としたる

但是は物をまことになれは地儀も人の気を薄といふ尽

すあまてあまし

二月の中の十日ばかりのほどやさしのよろこびてしも

なんいふことしていはれくるしかりとえなきにく

白雪花繁空拂地　緑枝弱不勝鶯　白氏文集　柳

紫記曰小少将の君はそこはかとなくあてになまめかし

く二月はかりのしたり柳のさましたり

具平親王集

鶯の羽かせにみたれて青柳のえたもゝとかりふしにける

柳くなよとてもあさをとのまるもみてまうし

一 梅さくも桜さきにも春の道はあまねく草木地よりきゝける

なれ月まつ花なからさくを花のをえとなしてまつしかるはれそ

万 梅は花の花は一しれは一枝はかりとをいましきはいの木

のれはしめてきさらきなゝやしきや　績也

春の月まつふすしかなるとふきし春の

おほろ月夜の

春宵一刻直千金　花有清香月有陰　蘇東坡

歌管楼台声細々　鞦韆院落夜沈々

女ハ春をおもふとかなしき人のいひしことをいへるなり
女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女　毛詩
いにしへより人のこゝろ〳〵なることをあらそひせし
春秋の勝負なるや
拾遺部恒
萬葉にはしをさきてさくすこし見えてハいとしいろハさかし
そのうへにそれそのことをもつとなふもらさはつきれとも千なき
曲　呂ハ春なれは律ハ秋のしらへといふなれ
一春はし　才一
のかりてよ我　上代
なそしかりし　指　命害

ましかはあはれかりけるにてゆきもみつきこそのみハあはれなれ
白虎通曰琴者禁也禁ニ上於邪氣ヲ以正ニ人心ヲ也
文選曰曠三養而神物下降何琴徳之深哉　馬融琴賦
はなのこゑもいよいよあはれなるをしらせもちはいく人ハてならはす
ひらしかよひんとおもひきてよるはれとて秋風のにこゑさらにひく
なひかさとそのこゑこひよかならいやしくとも何しきをきれに
まことよみあはれなさをなつにあるかり世をゆるさうしたる
おかりかりこれ岡よひきいつならもつらつくへ〳〵ハなくこ
れすとんとこら人ハちかくれをしもとてゆくかてすてあをとさき
よかしてあらきつあはれそてあまりかりそうれ月草をさて

しけるに此をねたむとなんをも云いつたへけりけるとかし
わかりける代よりあるとぞ

礼記曰楽者天地之和亦曰移風易俗天下皆寧言楽用
即正人理和陰陽

漢書礼楽志曰象天地而制礼楽所以通神明立人倫
師古曰倫理也亦曰孔子曰安上治民莫善於礼移風易俗
莫善於楽 師相曰此度至威孔子之言也 善謂善元善字 文選琴賦曰至人攄
思制為雅琴又曰能尽雅琴唯至人兮 大周正楽曰
賀翰吾人也常夜弾琴感鬼神見舞数曲斯亦妙之
至也

五音得失事

文選嘯賦註曰發徵則隆冬熙蒸騁羽則嚴霜夏凋
動商則秋霖春降奏角則谷風鳴條
翰曰悲夫也徵夏音也故冬發此声感火炎蒸 注羽
冬音也夏發此声感嚴霜至商秋音也春動此声則
秋霜降角春音也秋奏此声感温風鳴條也谷風則
春風也皆音律至妙感應有如此者善曰列子曰鄭
師文学琴於師襄〻〻曰子之琴何師文曰請嘗試
之於是當春而叩商絃以召南呂涼風稔至草木成
實及秋而叩角絃數夾鍾温風徐迴草木榮當夏而

羽絃以召黄鐘霜交下川池暴沍及冬叩徴絃以激
蕤賓陽光熾烈堅氷立散師襄曰雖師曠之清角鄒
衍吹律無以加之張湛曰商金音属秋南呂八月律
木音属春夾鐘二月律羽水音属冬黄鐘十一月律
徴火音属夏蕤賓五月律鄭玄礼記註曰喜感也声
類曰喜懸字也
うつほ物語一としかけ琴をひかせまゐらせらるゝのか
はうくさきくさく花のさくらかたに一枝かきまかせて云
月中の十日の日の夜にはかに雪ふりこほりてふる兄か
ときおりきよからぬおほきなる物のあまたあつまりへいめつしき

こゝろよけ こそハ思いらく いふくつうこそあらし ね
れうきんのひきゝ所にかゝりて音なかなくそなりけんいひけむ
この国にハいまた之ゆすとおやしくてならしき人の作るなるゝ
おほくしれ見てそのめかすにとれる流とのたまひハいやなきに
なけひて思ふにハ此のたひありし世々の人かたまとそく人のこれくくふ
うんつかそ

琴書曰堯大徳堯障感天神降聴儀然言和之至也
啟竟劉神人暢　礼記曰夫礼楽通乎鬼神蘼芸
香散楚江頭　湘弁叢辺渡不収
莫札悲絲写離怨　夜深簾外鬼神愁　徳琴
永顕

さてよつのをはしめしいふこそのかたうたと　譜
日本見在書目録　藤原佐世撰　楽家　廿三ア二百七巻
琴経一巻　蔡伯喈撰（窮之）　楽図　四巻　琴操　三巻
晋広陵相術撰
琴法一巻　趙耶利撰　琴録一巻
雑琴譜　百廿巻　琴用手法一巻　弾琴用手法一巻
雅琴手勢法一巻　既感篇一巻
きんのこととものまなふすとは、そのことそれむすめのてにいせん
家語之中　琴徳最優　文選琴賦
世にちかよりくさきて　出離

のちくハ之とてたへき人もなく
伯牙と云師紹ともあり紀師子と云師稽康と云人あり
なかにもよきをえらむ事ハむかしもありけり
かつる戒わすれて
ゟハつきぬるなれは一をききてはこをしるや　二説
そのうへ井にたてるかたきくさをはつかしとするもれかや　そとしも　部
とし　三説　むくしてハえらはれたるはむしやうなるをいつくしむ事とせんやなし
そし
信馬　宋　葛城呂
ゆれすれちく　由音

ましのて　輪手　臨絃也
くうしよ見えなきへかりて　まらぬれあはせとと
将律調　琵琶よわりといふ律よあるとき清く
きむかのしらへ　琴廿ヶ調　掻手（カクテ）　片垂（カタタリ）　水宇瓶（スイウヘイ）　蒼海波（サウカイハ）　鳥鳴（テウメイ）調
一説胡笳也　白氏六帖第十八日笳者胡人巻芦
葉次之以作楽也胡曰笳橘為琴曲
五六のはちをいとおもしろくすましてひき給ふ
前秋云五六撥とはかの枝ふかくふかゝはへる五六の破等也
いはゆる五六の撥の破といふなるへし
又案此遊盤渉調有先蹤可勘

いとうせう　うらやましく声を
侍とかたくなる人は　具
はしめよりかくれてこそあはめ
（行文）よろつかなとあるとしいふ心あるは海の底　辰とおなし心よ
（小葉 行路抄）おもひぬさしく名ごりなくきえてとつかしたるせいたしかは
わかねつ海に入ねとて　かきつらねあはれなるふあはれの衣のうへよりかきとらへ
此はの舞の心と相通ん
身とおもひてもかひもいとしあしかるへしと
（小町集）人のよは我かみのうへにあらはこそ夜は夢にて逢ふもかひなからめ
をきてひろきうみはとのふかさいはひもれまにおさへきさん

あるへいはくきかくなくさわしうてもいなふいろへ人いふなり
いたる也

小取ノ事ハ小ヲ得ル大取ノ事ハ大ヲ得ル福　孝經至徳要道篇

帝範曰逐午之鼎不可度以烹鶏捕鼠之猩不可使之搏獸一鈞之器不能容以江漢之流百石之粟不可満以斗宵之粟何則大非小之量輕非重之宜

我ならぬ人はひさしくつくらうそんなくかてうろ人になつき
なかしらからきすり

老子經曰柔之勝剛　舌柔齒剛　舌存齒亡　天下莫不知　知柔能久長剛強者傷也

よみ人しらずて
えくさやかさきとは　　秋居

我ならくさわかなつゆしらやかくてすそ山まで月とそく
おれなりすきしなのくしされともいろもかくなりつくし

天武天皇十四年七月庚午勅定明位以下進位已上朝服色淨位已上並着朱花　卅云波泥孜（はねず）　正位深紫直位淺紫勤位深緑務位淺緑追位深蒲萄進位淺蒲萄文武天皇大宝元年三月甲午始依新令改制官位号々々服制親王四品已上諸王諸臣一位者皆黒紫諸王二位已下諸臣三位以上者皆赤紫直冠

上四階深緋下四階浅緋勒冠四階深緑縁務冠四
階浅緑追冠四階深縹進冠四階浅縹皆深冠綺帯
白袴黒草冩其襴有直冠以上者皆白縛口襴勒以
下赤白脛裳
柏木此巻初ハ参議右衛門督後権中納言と云也
あり上古ハ位によりて袍色も浅深あり又廣明卿
天暦五年二月任権中納言従三位時九 元参議正四位下右大弁
除右大臣道袍奇上好撰集 なとひきや君か衣をぬきかへん
しあさきは東しりぬるを之じとといれ奇之
資房記ふと叙三位着改袍よし之見より

なほしまいりつゝじとももかく　梭 樹たといえつらう
女れはゆきをあ給ひありてそのしげるあやしうくや
又除二條后業平朝臣ニ通行しよりこそ
好撰云とてきてなら東にまかりけるに
伝跡道ハそのかほかし経給ふことつてしもあつんとれ 元良親王
世の中ハいとつまらぬ物を
たえて 逢ハさハ君ハあらし世の中の深き物とはいはひことと 深養父
そしあまきを流いきうかすかれ行そ
あつまをかたん記
あひみきれかとしめことハよかん　芳

忌いはらく　辞　拾遺

四月十よ日はろりみすならうえさきうれしく

四月中午日毎門記を鎮す年中行事

紀ふの衣ともいふおきおりしるくまつのあり　是春性抄

虎の尾の之天晃気の及ぶ所なり　涼宥　日本記

いつはりもうそもおもぬうち

わかくしきもちらはらくて思ひらん

ひむさき心やうはなくとうしせききてゆすかう又心をも

たえひ玉ひんるや

なちもしおくかくしもるくやうて

拾遺也

いひの海とつむとも尽きし夏水　睚　拾遺

眦睚

人の後をも人の子独いひとしつゆをも此海の

下官の将衣の独子娘子に　拾遺

ゆくは弟子おもう身をい多つりもふしそれは

不用

夏虫の身をいたつらになすもひとつおもひによりてなりけり

拾本　おきてゆき元にもしも地あをきましいけの露のうき独なり

元良記之家本　おきてゆかさしともつまの海も小海と独もうよさいつて

いてぬ今さしみいはほとに身をそれまとて海鳥あつめつれ

古今
あふほりし神のみかきや入ぬらし我身もしらぬなきにやする
れうしぬれぬをおやまちて　妃 日本紀　此書 周礼
まろうしう　祝言 万葉
かれ詠にかならずかならず心得へく　路　此路 日本紀　大路
万葉十九
かきつあわれ念ふくこれせつき行ぬとと哀てて
志はしれまね行へあらとうそしれはりしれかうしあて皆身
とあるらけそや行へと
大般若経云定業亦能轉金剛手之明灌頂經曰世
尊不動立仰軌復次觀自身成就尊形狀一百由旬

内所有雑調御鬼神兩持者皆悉能教懐又正報盡
者能延六月住　不動儀軌
我仍りそれあるふもとに　誰 夕己
人れ之ふらん　執
ゆかれ宮つらいれ給し　労く
無実すかりし何しかしるのれつとらしへてしそとしてれすと
大鏡云むかしは荷文の無心は佛経みとれすへい心を行
むかしとこれ流すへ佛経をとらへおきて毎朝れ念佛ら
かと行いれ
奈境逆子
おゆへしといむとていつねすらもしくれなにむさそ為とならぬるく

うんしやうく　前藤

おんなハうは本あなりまうし

伝ふお池をいれつゝおもひおもうは中なると

曽保冬　三名也

前藤ハ　めうも地は女ゆゑとよりあそしろかハすきしうり

おもしろうは本よといへ名ハ丹ゆうゑゆゑ小舟うり日なれハ

輔とは曽保介こと

なみとさらてふとい云なるもとわるハ

まくしいふなちてとし女ゆゑおうさし結と楊よおりいやさ御し

あるかうき世なひさしかゝへなうちすひとりこゝろく

ちまハなういと楊ハおそ女けしうき世よ結ひやさしくるへき

乃こゝろもなくちり　それく名をさそて花

かゝゆゑ乃ゝゝゝすハ　宰藤

いゝとてゆもとハ女ゆゑ名ハ之なかれしつゝなきこともとしいれうしと

所有三千界　男子諸煩悩合集為一人女人為業

障女人地獄使　能断佛種子外面似菩薩　内心

如夜叉涅般堅

みかいはうらもそよもゑをくゆつうゆれこひゆゑのいとしすのすゑ

ゑゆゑよし

五欣龍王経一日一夜間持三皈五戒人生卅三天

中野守守護又持五戒人廿五神王被護又以清浄
心合掌不生他念人者命終時生日摩尼天 経意
要須文云言五戒者是優婆塞 此云近事男 優婆夷 此云近事女
はかなく 詞 ツフヤク 囀
ときは木なともしれくらさとの色くに 蚖 ヒミケ
いろはさかきぬく 依青 又小青
万十六
人多しれはさかなる庭見るも無てひとりあやかしはへにさしとる蛇
ゆかしいとき紛よの 宕 いなきる庭 鷺鴛 幼
目
今しれ立やうよ うくふさういえらねとくかゝはねかしにとそ
れうなと多くぬつらきを此月ぬちてもとひかるこのとく

いとわりやうな殿さゝして のちはふかくさすかくろしぬるをや
おかしし
下 万葉 豊前国娘子
夕闇ハ道たつたつし月まちてゐませわかせこそのまにもみむ
夕露に紐ときやらぬ花をやはひかりしはるくとあはくかきそわらん
あさ
うら衣しくつ日ハ長うし白露にあれてしけつきぬつき地と
蝙蝠 ねとえく扇とつそうハしめし松に扇の花とや
あさえとうりれうもやう 浅緑
れうとれとめとあやまつなる
二条后 中納言長良公女 業平中将 文徳之母 仁明后 五条后 冬嗣大臣 三條院后 花山女院
之方民部卿女 通小宮関白弟 道信中将 藤原朝

女乃得具足入[?]女 而色香能女乃 殿上之大臣女 公達三人通君長者

類宣

乃まよし哉 障礙

我哉しし 我宣言 讃説曰 摩訶曰 亦有也

我ききとさぬし哉もせ我しくそてハさけきぬ我とぬきん

意の心見らハ無とそくもし哉のんやし見せり

いらはり意のてらのたけハまハいつくしいてぬら人めとふらん

そくにやつきふらやしふおるとしと

天眼の見れハ不退宿するを知とて天地我人の

四ハ志済す之天の照覧ハ我一也

あさゆふおそしとうちさるるまハ

哉の日ともはゆふ見をしむぬとらて我意のいはふるらん

身のハ女つらにすりぬるいらに見るハ

氣ととい ふへき人ハかのかして身のいうるにそり地つ気の

あふらにとしにゆふきてまへつりし哉 難

女乃ものわかりやうつふみさいまに行いふよる

とはしいふかさおきいふり我へとはまふてやうう

忠ふりてハあふ夜哉かとそていてハしわり

廻向文 願以此功徳 普及於一切 我等與衆生 皆

共成佛道 大海 我き門とハ普門 示現の心の以く

おもかけに廻向しけり
袈裟とハ　東宮切韻云　釈氏曰　袈裟二音　佉云計佉　天竺語也云元粧衣　又卯袪衣　綵
壇云修法衣梵言袈裟之服也
うらむまかりなくなりてハ　法服之
作るところもなくて　作物所
八月ハ大とのれの忌月ゆへ　夕霧ハ左府母葵上忌月也
龍朔二年六月　詔奉常寺毎五月六月停教音　王以
大宗文皇帝文徳太后忌月故也
催さし　次て　近江国倫次疾也
すかく届くる　綱樂

つきくることはかなしくもおもひかくそしておもハ月ことゑて　廻
かくひやう　脚　和名云　醍醐家有脚気論　脚気一名脚病　俗云何乃介
うつかすね源中納言饒識よりて行てたまふ
いやうハ見ふて行くと思ひ
案ことよりハ病の名とおもひきこえんかし
安倍ふ東三条殿ころより流るへきとあるも
かゝるありとも病とてかいはすれしてあるく
掛冠変有端
六文孝経曰七十孝致仕懸其所仕之車置諸廟永
使子孫監而則正而立身之終其要然也

漢薩廣德為御史大夫〻十月乞帰沛太守迎之界
上沛以為榮懸其車傳子孫 沛元曰懸其所賜安車以榮級社懸車亦云 説也
おりさしたとおいらせてなく
今日正閑天亦暖 可能扶病暫来曰 白氏文集
かれ賀れ日はあつきこてつはしよるてひらめれ苦みをまとと
きるへしともいあと家よもわしかきま
赤白橡 蒲萄染下襲 青色麹塵之蘋芽童
かくん卅人をふいこてかきまとまあり
三十仙人誰得聴 含元殿角管絃声 章孝標
仙遊霞 大食調曲 拍子十六 舞六
仙遊霞もいふとのあそれいて

楽小曲而官攙笛譜為性調曲
春のしらへはくれもなくほうらいあつてはなとしらう
冬こもり春のはさらのちるもとは中垣よりこそ梅のちりかる 保養文
みかいまつて待しきぬ梅の花とこそ君とかくしおりてふらむ 延喜
色許禰の宮のそしわり 人せ海くく保王と云也
まてなきそり
うれしとて子おもふとさけのとてまていろをもするれもようてわすらし
日月
世中のあそれのちとまちつて之のはきすることあるはなかりし
日月
身にまつてかまいまるへ御のでてまいるをすることれてにけり
はらさまりゆらねそして おいへのいまれ ことさすらく

古今
はかなくて年もゆくらんこゝろもあへりてこそかへらぬやまさるに つらし
まことにすくなきにかよはせれ給ていとあやしく
明順奉呪咀後一条院之由御堂関白令聞給て明
順直召問給明順飯家吐血死 云々 是等物語忠し例也
それのみならずや 気上也
あやしく身ゆくとかたる心地上かく 後漢 史記 寵也

河海抄巻第十四 正六位上物語博士源惟良撰

第廿一 柏木

巻名

柏木よ葉もりの神はまさすとも人なれぬへき宿の梢か

右兵衛の督のむすめの君 これによりて柏木と云

あつくの世中をさかしく

おもひさへぬ我身ひとつの憂かりしをへて世をも恨つるかな

野山にもあへかたきむ道のありさまするへく

古今 素性
いつくにか世をはいとはん心こそ野にも山にもまとふへらなれ

古今
侘つゝもなからへん花しちらすは世も厭ふらし

口
世のうきめ見えぬ山ちへいらむにはおもふ人こそほたしなりけれ

排遠
けふりもたえ跡なき海てきつらん君りは迷はあまりの堂
身まても人の世の中のまたならぬ身は

六帖 異本
うくも世のなかに我身の身をのみ身まても人の年の松の立まくて
小野小町
ひとつなりひくもりて思ふ心の水は

古今
夏虫の身をいたつらになすこともひとつ思ひによりてなりけり
ちかきとうきねかきり

古今
浅河ちかくてあまたうき節は夏も風にみえてすゑをは
いまはとてそりたもむ煙にむすほれて思ひやりこそん
むねをのみまよりしむ煙かはりてせん君なるかよなるき鍵と

此世をとものらといふくそむりむ煙のひそほまこつ
人わりなきね底にまかせいふりて日かりかとしもなし
人わりの道なかりてはおほかれは
しるしはしるりを海小あかまなみとせし
しりを海よみをとなき君は立ぬ千人やくかね世すりそ海へそ
わきもをふかあそひのしらして
人の世をおもひといくかしを海しらはきかあはれもいそかはまり
しかそはよせしわたと　　おもくしかはれゆゑ
かくことかこなひ人の思ひきえよしかしてくる

或物語云役若小角住於葛城山相伝云能使鬼神

汲水採薪爲不用余已以呪縛之 二 文武天皇代

人追此事死

かこいりしらく物を持ておりひ

秋の月乃く紅葉ちれる頃ときこえいりみて物をもちて身

おんゆ身しかともおやくハ女乃のみにて持て

陰陽師 おん尾ししんさきよひくるひをしとふもちて

とあり 定家に 新行者よハおもふ身しと申て

伝ケ物語よハおん尾ししとるおん尾しりんたさハ

出てきしとて子ちふ下とありらん不物語云実おとて小さきこ

急行二れかとかくこちふ子をもとハ屯つきハ女乃のみらとらん

つひける

侍ふしは人なきしかも

まふしハ月せは人な侍しくハつくしまゐらし侍なるに

なふふまひを 陀羅尼

かくはおもへれ身にてならひはなふかりハ 此挑 挑ん也

經に 諸佛既離我執と云り 菩薩侍くハ見さし挑もと

ともまにさるへう

あやまりてひきいろく人にかれ名をとらせて身をもそうらねなくん

むかしかれ世ふとあきし身にてはおやけける

伝ケ物語云う阿部し 尾帝 かしし哉ちるしめしつまなく

葉子
はゝとこそいふなりつゝりてきまゝいは女ぬひとは 文案后号大家息 不二条后
こゝす不女とは侍るそもろへにおとろえてとめきぬいことのあらく
あまのうるもにすむ去れ我うると書とうつらむ世といふなり
侍とひをあふし無まさ升れ男かとうつす成ぬると
かれ侍れうらよあへさまありかいむとのちあ行てよろし
作者不知 思あまりあかしむれあるうちひよふく見といむもととひ世よ
急とひくらうく侍とふ我もい中く男にもうつさうきり
かくれ侍る御侍さましても
定縁れうことてもらくはうつうきものあとまゆ子なく
もつ男とやひとつよるあおひあいそて侍さかきは人れうさう

見ぬ葉下巻 未勘
きよりうへよ
あやしき鳥のあとのはしかく 蒼頡観鳥跡作文字 史記
帝王世記曰蒼頡文取像鳥跡始作文字史官之作
蓋自此始記其言行以来亦蔵之名曰書契
いにしへ昔のちぎりかくいとよはくしもかしこきんと
列てふといもあともあらにやよさつそとひしかるむ
きいはむこよむうそをく 未勘
もひ偕ととれうり 伏偕 花厳経曰牙為伏
虎上盧遮那よいて葉中菜上侍千ちえいは伏人

これ世をくしゅうりねまいのちれよりつきもなこしかるとうちしや
要集云有智之人以智惠力能令地獄極重之業現
世軽受愚癡之現世軽業地獄重受鞍重恠受
れりいもんもすみ中をも　圍碁　長食ホ乎勘子業もこ
ところくまやすかんれしとえひやはしつきて不
取く饗　庭　右次所　宮司　中文職
らやつけたまへるもりしめらく
さいまき　たくまや
故よかくまてつくにたゆ行う
李部王記曰延長八年九月廿八日申剋法皇の大

持從奉詩上先是上詔侍臣令弁備法皇御用大床
子二脚鋪物上加褥公奉法皇飲の府傳服息及誘
霊男女別おまとも法皇源章加持弁相似死時
の法名事有
おれつんちれ御こそうん侍きまへ
人の親のかいかこにあり悲とも子をおもふ道にまようひぬるかな
とらまささきてあつかんちれおもひ倍なりこく　侍理
すことへ侍くいりれとこうハふとわもかよ　験付
寛平法皇のかねす紀
かとくれ君　源氏流ちはえこれをきをおもとおもれ流とこと

あり又おもくとも多あり無女房なとの日記にも付する
ものにやはなし也又殿の内の記也和語の中よりも見れ
よりおかし
なとかくいくらともある事も男を
（たと）いくらもあはし秘方をみしてとくおもへりまして思ふ河
まさしき人ものうくて
（たとし）まつよりも又知人もなき意を深きさあへるもりしつる
（ほ復）こやれうらに（かね）とのきをいふてくまて
（古勝）宮奥不悉盡の人ひとりとハなりたもしつとハ此の上の
ほそと云也

いはハえつりある人とまくうちちもし故
業平朝臣ハ小一条院女の（女）影光ハ此邪気おそれたる事流れ
ひとめのひとしく思ついて行てはぬにかくしおそろしき也行方
の此時邪気人のつきてハまことうまて業しとて手を
うちてもらしひとかけしてえもおりけるも
とろきにいりをも行へいと雅しかれりし朱雀院の御つときハ葛のつるゆか
さきうへとく
業平朝臣葉田あへの為の中に開白ノ成親ハよりてこしハす
小野の宮へまいりて行へりまた瀬とりやののもおもしてちかし
くれくきつ行へりみしみなく勅使ありてころしてやらいとおし

う候く第ふは後うおもいかく下侍りうとしとうくちうさ
ふつきくもやれうよふうこ命す侍つまとさるすあさ
類ハとくもふとも下侍りてあんといくあう成て侍ま
は公私に付て大小すも下会ちんし思程ふまハ誕れとと
いうすう程しかいさ守く棄門下つうあとこ毎やうにの程
へとともて流れ世さ侍しうしいと命あう風の末
とふさあけるくきやよう也つき近ハ流家と毎ろひてさ
程くかりおいれる人ととこ至もすれわれに本定に成終
病中の紀平明なう客人にて對面すう下あ後たあるよう
侍うほひふ侍　髑髏　荘子

とりまこさきあらへあるへしあくしとう
未能事人やれや世中のとりまこさきうつるあるうしうつろひ
うつしんとらしせしうあるそ　觀世
君ふつうふつほすれとあるは（れほとしるく
礼記に六十指使といへるあるは八指木權大納言七十年
六十六の頃に
法のれかれてうれやそれ月　加賀識米見世
いつうはうきん　猶言
これうしゆるさま侍うひう　寺辭勅すせ
きよあはすし座ほとつうしよふてねいはうの能と思はれとあ侍る

伊勢物語 伊行人
つゐに行道とハかねて聞しかときのふけふとハ思ハざりしを

今日不知死明日不知死何友造作栖安穏無常身

香山居士云

たひらかにいとゞ心うきかなしさよりもきは

我こそやがて人にかはる病ぞ世あるもおもふ身にとなりなむ

またあはれなきいのちはかなしも

世皆不牢固　如水沫泡焔　法華経

幻世春来夢　浮生水上泡　白氏文集

古今 又別
水のあはのきえてうき世といひながら流れてなをもたのまるゝかな

うきながらきえせぬものハ身なりけりうらやましきハ水の泡哉

流へかへりゆるみまつりせり

五十日餅

大鏡云此時延喜村上の御門むまれさせ給へる五十日の餅

殿上へいださせ給つるに伊衡中将のよめるうた

とて　よみける

ひとゝせにこよひかぞふる今よりは百年までの月影をみん

まよひぬるこれをとをさゝせおはしましきをかしけるまさよ

いまひつ人ことゝもあかくハこそしてあらぬとはなす月をとも

うちかへしをゆきよのことゝもはなりたるもよからぬ

といはむとするはゆきさまやとゆらんとて

六条院入道宮の君若君の誓の子なるよろこびけりて

あさうしと海へしゆきしと又は邪一段云魚とい梢木以よ
かりをも女こ此文此に服殺仕此大臣係すりあなうよさ不
と海く海とゆるへきにあらはいまさたま為猪此み句此中すり
にやの段の義ありと直か此みめんなりしくともある此
これらをはおしきまて々てかくもさすきは

番匠也

いはやいろなうしと末経ひて
ヶ様文紀也独文ともいまや文ともいふ之 見延千式
紅葉かへてにゆるしいろと云紅よ擬そる時はいは海や下文紅と
世の叙む

ちりつもを納むとうるやしらうすまき衍て
（古さ）ちりくもを袖かとうるや世中とありしかうふ此わうすしありん
（明石中宮）女花の事く物ちうへちて此りよ此此さを海よちうしきつき
きるみうつてらおいは海よ人 年氣付或家おいはおしんへかお
いはせらう
（伝聞）きるすなくとをすへて海よへあつ世く花を盛とをやさつき（仁教皇后）
海女こぬ 服子 非化寓 文肝腰 横波 服尾あとまり
さつらいありひてなけくよなつけしとうも衍子八とうともなく
しる流よりひなまとせよ成すてたち経てつとかなりかまよかを
さりしまんらうちをはるともいさおかりかなり付まきんうし

五十八翁方有後　静思喜亦堪嗟
持盃祝願無他語　慎勿頑愚似汝父耶　白楽天自嘲詩
つゐ天ハ子なくして老よのうむへき五十八にしてもうけて男子
と生すむすまてうそとうさになるまで生遅とかく
そうしてむかいて作りしを係きて事楽沢ハ四十八にて業なる
と生する五十と十ともすくなうしとあるなれあり倣説する佯
作ス人まいらつりまありていとふよねえとかきて白氏か楽也
此身何足歎一聚虚空塵と云句と載ける
わうれとうあはすハあへうえあいうへるは女児也なうなのへて
いとなしきさうとなかしで

あへうんハあうるん也二といひて男なしなるとも女ハ多かる
ひんなうと云也一説云條氏うるあるはひとしうさうと
二すらとし思ひて此條乳落香女院勝月秋尚得子孔（てと）
此説不可用
誰か世にうへ多くと思ひしとへとていかで光孫の松ハなる人
（古と）あつはらいふへの木松よう世からうつ作をくなてちきるへ
ひきよし　蝶所
もうかくなきふるは日今すとも志つ作花
たがりふしこは月日をも志つね具よ風しう　ふうそ杖とつけて死
なりくつうにまうしを少ヒくうとて

枕送
かりかねもかへりてこそゆけ春霞たちなからまくらかな

たのみし行しらぬもまなし

大鏡云相撲節のとゐんと口惜おもし佐ぬまと九月に（相撲節）

うせさせ給ひて九日の節ハとまりなとしてとまりをはへり

長月太后の御いみにて九重をとも菊すまをはへり

かくありしをまはは哉こてこのせ給のかへりてよりの中よりとも侍り

よきり

悲しきハうきよのつねに成りしも人ハ猶うき世なりひあはれ

神わさしもきさおもほひ　神（カンワザ）わさ月を花神能うきをまき

しきせはゆうへのへ侍をはしとて

嬉しきも憂きも心ハひとつにてわかれぬ物ハ涙なりけり

あまり世のことりりと思ふりそのあらく御なみた人の世にとなきそ

をふらくるかハおりりにまつてとらそか八代の目一とくらよ

水原抄云大きなる人之栗くおみハ海ことよ太きなりすに

いひならせとも目なるよし〻抄説あり

あいなきてうきの行し　なよひそきなきをかひとも見

こしはうりハとくらかおほゆるを

左右
かの業平の桜しんあるも去としハりハそさらんよふを

あひみんことハとらなさこそ

左右
春ことに花の盛ハありなめとあひみんことハ命なりけり

六七 春ハ柳のめもはるおハめく咲安花のもえたつるなし

浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

よりあはせく帰る雁をいとふかけてわが袖とはなりぬ

おやのきぬのかりもきをやつれ給へり

孝経曰孝子之喪親也　父母没斬衰居憂喪之衰

袂也　兕井依礼亡容斬衰之哭其声若往而不反依

遠餘声也

喪容覧々素无容儀所以至於長也

袂の表よりつくろひたるとみてうちまきよりもうちと備なる

相違の歟ふやつれたるとや一義云致仕大臣とはかりより三条

大臣の六条院よ対面の時も大臣かうにしものはまかゆりに

まハ母宮の孝養の時よりもこの時ハ猶なげきやなりなり

とはなし

いとしく春毎かとみゆるらくのきの常よりことなるに

ゑとりふくてあらめ袖へ夕暮のめぐらしきおひにみえて

夕暮のめでたきかなしさとみえなりとはりなりかり

六の大臣の常にわきてさかきにてうれの衣きたる春毎

日よりみなさきとの枝とし

縁なる日より葉とりて春ハ見はハいかくの花ありなから

おなりに宿はよりつれかとれつきく

啼わたる鴈の涙やおつらむおもひのやとの萩のうへの露
ひともとゝおもひしきくもおりしきていろこそまされかれむゝ
秋おりひ落しはく
左大臣卿
君ならて一むらの蔭出にし音のさけききへとも御よさかる
伊勢麗之　菅千麗之
いよすむをまして
かたゝれつ月　作秋
柞木とかくとのとのきまにちやうさはいろして枝にかれ
しみかちきうあはれみかにさ見あへはみれりしさにになしとの数て
在地敷為連坦枝　長根斎
さとのはいなるおもに雨にはかかん葉ちるれ花のこするみさと

大太臣ゆ之し
柞木よ葉ちれ花は滴えしとも人らんつきむ宿れ木とて忍ら
柞木よ葉ちる花のむしけるとしてうかりし名を流るる
大和物語云枇敵左大臣仲平よかしとし家にしりしのきあり
左大臣つきし
きはさともつらきとりおかしそてさきつきくもさつりもは
我宿とこころすひてかかれ葉のなしかはみにおりかとこすり
柞木よ葉ちる花のなしけるとこしてうおりし名にならさ流る　後者
此總蓋れ人死蓋なる花花ハ樹花れ名之　但基俊著ハ蒼蒼
花ハ花つくれ木とは非守柘と称を守や弘仁式弓れ三級柘れ
可よ委見ゑて雖然古人名餘本よ注くみ了奥義抄
後成ハ自筆本よはりしハ木定彼ハなしハかしうさとある

かは

おもしろきハ世のことわりなきとし

秋の色の吹もはてぬかなしけれ世のとわりとおもひなから

人ほめより

保昌の娘の秋をみよりつきまたあるまよ人とおもひしとなる

そのり　実也　色をすきてさふらう

たちの家のうち業なりしかてわれもとにらそさひくれまとも

いとちらきかの事なきは

本歌秀句

天与善人吾不信右将軍墓草初秋　紀在昌

右大将保忠室と作まう詩也　右大臣時平息 母基康親王女　仍を代と云

此韻字本詩ハ秋ことあるをいふあらくあるく春し翁きてまうこ

此書ハ優劣ある所卯月の比なまさハ秋の字ふるくハ季節

お遠す春の字出くいかなしかなひ本歌の心を色あひ眼お多の

景気と添へまて秋と庵は思ふくあとことなり富尺てまこう

うりしとのをまこのう深きそのくまくのりハよりきさしもとなる

色あるりとありめたす又准擬あさよめる深四條大納言公任

撰の　和漢朗詠小隠森拈柳殊撹春世去色蕿落危鏞

壊宇秋有秋巻とあの公業億り速昌宮賦の中の句也賦

よハ東韻の列出して有秋ゆせしとあふと色与風辧對と思ハ

秋与風ふや声の字よなりかつてまへありを声の對をとゆやり

に風流をありて興あるよしいひける事なり此歌経などには

花宴を白と称し雨不をあり大宮野曲也とも今の世におもしろ

中比の先達の不為言とも是を定上古と云を従ひて衆大

納言成通卿院まで奏く此抄とあり其をよりて人々をとりて

鳥なりせんとやとあるは何くゆへしとあるやをしてと

末せんとり思しとて手海やうと萬庭よりなひかひくかう

めでたきをへくそあらうよ海をんとらうひ毎うきを時の

人感してをと云へる

妙音院相国家のは八音爲京洛莠美容とし朗

詠の下句とは江湖潦倒僧なりとせしまゝうるむ文とあらく

京氣と論ずるすら不可勝計

あつしかるは　惜 アタラシ

第廿二　横笛

異名

よこ笛はちうへのことにわかれてねといひわたしく成法るやうき

これやのちのちつてぬんさし行てこゑ百あとうんへちかせさこを行世

李部王記云天慶十年三月十九日於八講結願大皇大后

於梅宮没法花八講

参今時夕誦也余修誦調布百端南伝沙金百両納
瑠璃壺一口小論也
薫大将の為に柏木大納言の追善と列にせらるなり
此帝ハ二宮をかく人わらはれなるやうにて
朱雀院　二宮　落葉宮
みてらのかたはらちかき林にぬきいてたるたかうなそのわたりの
山にほれるところなとの山さとにつきてハあはれなれハ奉れ給ふとて
尋泉上山遠　看筝出林底　白氏文集
天暦日記云延長六年亭子院よりたかうなたてまつれ給ひ
御使よしあるへかりけれは大うちき給

逆筝未抽鳴鳳管　盤根纔點臥龍文　朗詠
冷泉院へたかうなたてまつるとて節を竹にかきて　花山院御製
世中にふるかひもなき竹の子ハわかつむとしをたてまつるなり
御返し
拾遺十八云
年へぬる竹のよはひをかへしても子のよをなかくなさんとそおもふ
春抄へ海よりきさはつまつかさうるくして侍りき浅女とも此花つま繕を
流とへ句まくからにらきしちりろうと同きを迷ハところはろかりとしてくを枝
覚胡法師　延喜比　定額此導師
春の林はところところもいとはやきハ南面ぬはりりそてたる君

まし

孝は野干かくて人をとなりきり世よところをさ人のためハ
いしかみさわさふうんあなかとききえて竹のふしと
地蔵本願経曰父子至親岐路各別縦然相逢無肯代
受

淺（ちゃ）き歎いしともと

疊子　又楊子　和名　琵子(口上)　琵　音雷又玉琵　作鉳　北仙家
名つきれたるやくよ上ハぬりとそれ赤名とあそれそてうやうら
とのうりときかうとみるくしうかや
内ハ朱漆外ハ黒漆螺鈿様々く

菓子なしとて万はうり内外蜜飯納く
詩よ金罍とあるハ酒罇也りさいと訓礼記山罍其形似壺
容一斛刻而畫之為雲雷之形也云々
韓詩云天子以玉飾諸侯大夫皆以黄金等以梓是等
皆酒器也然而我朝横皮形也

きようあそかれこうらそうと
抜遣九
きよふうともあそとともちぬ白菊はさてをしき世よと花へと我身う
うき世子ハあるぬ不知ゆりうてうむくよかよ思ひとりつま
抜遣　恋石
世の中にわすれぬ木をもうてしる年あまわするかみうかくさむ
いしぬくゆきをわするくとの心のふ柳とせうりてはゆそを花ゆ心解かなう

かつらハ流ゆくきしてことさらにいろちり失らんらうして
楊柳と白色よ女よへ鴨以菜花とあとき么にうよへるとと
小硯量兒
いとあめうしをそりちらして
うけれハねさくハつくそ行てねとをしてそりつゝ行そてつくきよ
伊し行へもちて君代へよういとほさ肌にまきり流る流ハをねふ
そや
梅とは比らかりもろうう　展眉　ねおりへあさ称代わて
柔和の姿也　ゑと
花の流りハありあるとしらう梅ほりきこと行上

春ことに花の盛ハありなめしおひらんむとしは命なりけり
うきめとてすまするうう呉竹の子ハ拾なさき抱かれ成ける
いはさゝに行おひつくむ竹の子のうき命しきさきかとハ志るや
あさの中へ比ねあとまきる流り
春ハ毎に花の一つ不咲もりと見てあたれハ梅うほさまる
おさな児君へあうなとほへあさしあはくく行ふるうう
あし鴨の毛寄く池水やちまてとも見えき比うさして何まことはやハ
多集(スダク)　万葉　潜　日上　少わとりの毛寄く
をむさいの花とも出の綠志けき　野へとつへ女まうつゆるへと
ことし行事

藤原の利基朝臣右近中将にて住侍ける曹子の身ま
かりてのち人もすます成にけるを秋の夜ふけてものよ
りまうて来けるついてにみいれけれはもとありし前栽もいと
しけくあれたりけるをみてはやくそこに侍りけれは昔
をおもひやりてよみける

君かうへし一むら薄虫の音のしけき野へとも成にける哉

ことのねもなみたにうかふよるもなし

むかし人はことゝつまもたえぬるよのそらにたゝし月日かめくり来ぬ

昔伯牙鐘子期といひし二人琴の好手ありけり鐘子期死
てはいはく我をしる人あるましきまてハよりうしとて伯牙絃を絶
てひきさりし事なり

むかしの人ハことハあれとも此きこりをなふ
ありふとハつまと思ひし我をくかくさたかはあれとみれてなりまさる
世のうきつましいふやにてうし
僧生のとほそか京にとく露の行（よく）世のうきつ海とおもひつゝすなし
かきりなきよあるらんとうらなからめて　いそよの中うくとうらへき係行天　手上てものはおりはさしまり異人
忘てされかきりなきにあ世さりをハつらきと思ひてなけかちす涙し
修ハよろつなりけることよりやとも我てかくハかりかくも行へ
ことの禄とまて此人の哀ならへにハ海かなきをたえしとも
我ふつなりたハとハ弟の昔にたとせふとつなりたとおもひし人頼

いてとなふあきらけんとし
如聴仙楽耳暫明　琵琶引
ちりつるハ深すれとハ
和琴第二絃也
月さしいてゝくもりなきそらしてすゝしかりし雁
ゝをはらふとこそきこゆね
らうましく聞て行えし
たと
夕霧にてまうらかりし花落の数ゝ人えゆる秋の夜の月
秋ゝせにつらとはきこゆね雁かねハ春ハくるとともつけにし
風ハ多ゆむく風あつまるなり
さむさむく風ハ夜ふけて吹吹松風秋かせのつもりいとと涼しき
ゆふまんとひき行か
想夫恋　手洞

おとゝいていぬもいふまて涼しとて人よそらにしきとうる
やまハちきり水のさきてりいゝくなりなりいふよろさま
玉のとよそひくらとし侍ぬのとりおかりしらんとて
なさいとゝみつさかりさしよるも露くあかり風いうすると玉のとおとそん
かなよりもきみにしのりしもあつまよ人なかりとこゝろよきき
おりんたゑるんよりなかりしもふかしいり侍ときゝて行へて
いはの笛の意のまぬの程落にあけるなかくきしと云世されいある
そなすり
むつまとちのふひとつをいはくもつこゆる侍まて侍きてふまいはし
ゆくなとてつゝく行か　日ともりといはなりふよりへなるかう

海ハ沙くハ昔の大君の御時の御箸の音ふ出て人のまん中ハゆくと云也

よき笛の　横笛一名天地秋

いとゝわきいつ方の山のとこゑハいとおもしろくて日ころあらくも思ひて

伊毛土安祢土ヶ尼乃也男世万安良之岐天名
いもとあまといふさの山の風まあらくもてくる

土利布礼曽也可保万左尼可介也土天末左尼可介
ちりおちてるやうほかにふりもやとて海さはるま

や　也

催馬楽妹与我

かく高よの月まんやしく葉こゑ人ハあはれとおもふ

くれて
くいりおもしろふよしとへ今つるに稀にあはれむ人々そうれ

ぬるて行ふ吹よる高うきのとさるハ心のあるき袮よつる人にむ

振り白
おひかうし袮よりて藤さ笛行の末のもろくならむやとハ

この歳三ハ只くあきゝ行てつゆとあし行ハ　呪吐三

夜あつき涼月のくに

大きさハ月をとらえしおもてくはの手きハ人のおもひもあはれとの

海いとにいの歳をあつさてあきあかし行つ

煩　わいこ　万象

かれそらめの一称んのうらみの歳をしりしハあつまとも思よ海へハ

あまそてもいおのきよの風をかとはよふわさあまりしれハうらみ

まとふいしとめしとかりふ世あまりとかりつきてとあさ

にそこゆしとさも振ふ

ところハ閑眼可守世　眼縁一念生処是定　至文

貫之集く世中心ほそくおほえしてたまれやうなりしを
まハ源公忠朝臣許に此奇とふんまいてとらせ給ひ
なつとふ病おもくなりてむつかしくなりかなりにむなし
なりにやてまつる月ごとにあらなきに世なりかりあるを給
あしきにしとおもひしとを後ほとなく給ふときはこえて
かくうきてあつきりてかれとかりし奇ともとこえてを
なきに補絶そ久河原によき屋のをを給ひより
紫のゆかり
あるなど二条のわか君と日ころなりしてもあかりひなと
二条ハ今上の子様妙ちに式部卿前房ハ薫大将
おかつきをれたらうき海とりとりもなそてれハいしむよかりせんとある

それ新よ　重塔大将也　随身と重塔の被友なさハ軽服
身と云也
紫の家
宮なれわか君ハ　薫大将
ある女あいのみとれのりとりとまて　二藍直衣のきまと
へ我てとハおさなきへし衣裳とはめきちと直衣ハなり
とさてとふなり　おひたちけなき姿之
ことおもりいらく他人の御ふなさとし　子
式部卿の家藤の宴なるを動
此式部卿大臣公雅中納言成信の伝とあまりハ坂良子死能元元
長親王　二品式部卿　元利親王　二品式部卿母日　母人の女御化代の
母日氏

法花経之名誉不少如何大乗之甫沈哉以貞保親王
手跡此大手経弁之者陽成院九歳也尤有其寄乎
亦云此哉ノ作者ハ擡斎院父相模也手跡を貞保親
王撰ともいふ
かれ葛ハおりひあみせ之ゑひらて行つきゝ深き雁ばとも花つ毎
へふみすとの縁て
後真人云花葛不須(モチイ)說
花つ毎人とい葛と係深見女子愛此との亦為花

廿二　並　鈴虫
虫名
あはれなる秋といふことを知りおもてかへつき鈴虫はなき
花つまなしあはれはとのおかしきめうちなきとまるに
花机覆縁文紗目綾也　雍和元年六月十八日院
記曰経櫃各置花足下机加花文綾覆二色綾地尖
法花此已経　曼陀羅
忘れかたし此百物のはなるけふ毎に行けり百ヶ者あを
無佛世も此月をとのしひとへなくれてつりつくまかくはつる流
弥陀脇士菩薩　観音勢至之

唐太祖大武皇帝為太祖元皇帝元貞皇后造梅
檀等身像三軀　延喜式盧舍那并脇侍菩薩檀像
一合龍
あかつき　閼伽具　々々梵語也
かうしのなかとわいせくみなみ石のうへんちをとうじりくろきとく
荷葉方　蓮花のはなひらへて右のこのはしとあはせてさしたる花
窓とそのあ抹香のごとく小焼香をさしわたるきはほうくとしるも
きうあくなるをのをえらもとも　計文塲金
ちむきりくのつくみにみへく佛のれおほしちやうなやのみへ不かけら
まじわり　一次花足机

れおほしハ　須 ウナミ　ちやうなハ　頂戴也一説云
圓帳臺の経の机を佛の頂上に案じへたる花の内を好
ひとしう海の帳のかなるほうと仰おりてなからあるく法花の
曇池花鳥をまさるしまえ佛のおかしほし間の帳の内に
経机を安置をかきたちる
幾やかれたく　行香のす　見覚見経々こ
關白朝座夕座中間練行夜書兩座後夜行之備 人数式ハ人数見
よしけらのよふなにかれ花のなかれ座をかにへなくなくおかりかをとく
一く池中花盡滿花々惣是往生人各留半座乘花
葉待我閻浮同行人　五會讃

七そうのほうふく　七僧法服　講師 讀師 咒願 三礼 唄 散花 堂達 謂之七僧　御記

日天徳四年六月九日丁丑此日理子内親王家於円城
寺修四十九日御法事其佛経具及七僧法服料内
等預給合調備使左近少将伊渉諷経布施調布二百
端又差侍臣五六人寂行香侵

あやめのかうひらきて　粧　装束事也

はらとてまゆみけきはらさくと　寛　舌サキラ　弁し

舌の事也

ほふのちにときところなけすほくところをさいてはひよきて

きえうしとも　えうきり

蒼茫霧雨之霽初寒汀鷺立重畳烟嵐之断処晩
寺僧帰閑眠

きよふあそびてぬ世いくちくあるはまれと

あゆみくぬ舎のつきのかとんりもうきとたけくなりゆすかな　左と

又多のとのとらやくの　庄　ほしこは　牧　かとくり女田中高風このとは

くしほのハこなりの三條の家のことにおほめ経

令諸国与田部長倉　ハノシクシタテメシハノミアケラ　日本紀

あきのたそて　いはいけ大咒

くはの家より　草舎

月の空むあはへりつるなと

延喜の時八月十五夜仏徹殿の萩さかりに殿人あつまりて
ひことも月の宴して侍る時の歌抗進にあり　藤原忠房
月ころはひかりのみとくもゐあかぬなかりけるにさ中にこそし
あさかは月のひかりはまされと秋の世のほとほとくるしのは忍
ふるはれき

いつとても月みぬ秋はなきものをわきて今夜のめつらしきかな
三五夜中新月色　二千里外故人心　白楽天
わかなかは月のひかりもおほえしを昔の今夜もさしてなつかし
行人并水原おほよせ旅々十二廻中白と書載あり
条着これはなり

おもしろき秋とはいふしとまりにしとかきてかつてさ新出せしと忘
すてもしつの名見え給ふまて家伏せしかいはしめ柳とささとおもそかける
左大弁或は大輔　不入系図
おもしろくいつと惜しみ行へり
わくかる秋の月も花もともにおもしろくはあかすまさし／よこのころや
月誌はおもしき雪井ふたてかりて我宿にしかさきてかつきに
つとにほそ月ともえくしる我宿にしかおかまし このかりと
ろくいしよみてし　禄最世二
大納言来門菅宰相　不入系図
まつみなうきにはいりゆくはつりくつなく　直衣布袴す

西京雑記云上臈者上衣下着下襲衣　併使不幸す
いとつらき世はゆめはかなされ
（古今）恋しさいくたびの名になけし世中は浮ゆくなきこそとくいかなとも
おかつらなれは侍りける比に
（拾遺）ありしにありし山つていとしかれこにおかつらはすはなる春な
見る人はうむきりも冬の世と
（後撰）これ人はうむきこそ世中にある風にはみとしいふとも
あちきなのゆまのまぼろとて
涅槃経曰　亦如朝露勢不久停
韓子曰人生一世生若朝露之託於桐葉其命幾何

豈不惑哉之ここ好漢書列伝第三十九王充傳
なくきむほとをみちらきひしては身みつくあきさらり
すゑひさしためしみえ
目連　是云摩訶目犍連羅耶那　唐云大者木蔵氏
盂蘭盆経ニハ落餓鬼中　目連救母生天経ニハ在大鑊
熱地獄中二経参差スル也　但救母経云大藏目録ニ不入也

日本政府圖書
大日本帝國圖書之印
内閣文庫
内閣文庫
丁数 88 枚

国立公文書館
National Archives of Japan